明治廿九年十月廿五日

女學雜誌

第四百廿八號

社告

◉本誌は每月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◉二十五日發行の分は即ち本號の如くにして、女界教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置くこと、即ち前號の明證するが如し

○本誌の定價の割合に廉ならざるは、特に遺憾とする所なり、然れども事務に迂なる吾等の事業に於ては之を如何んともすると能はず。即ち、定價は元の如く、一冊無郵稅十錢に定むべし。

○單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし。

女學雜誌定價表

前金	廣告料	送金	注文
壹冊 價 金拾錢（無郵稅） 一年前金 金貳圓	一行 一回（廿七字詰）前金十錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

坪内逍遙著

文學その折々

●定價金壹圓●遞送料廿錢 ●紙數凡千餘頁●紙質精良印刷鮮明

本書は坪内逍遙氏が多年間の著述にかゝる各種の論説批評、諷刺的瑣談、滑稽小話等を新たに訂正刪潤し、或は部門を分ち、或は年月の序を逐ふて集輯せる者なり試みに其一二を擧ぐれば或は文學上の時事を評論し、時に史傳の筆は逸して海外文豪を解剖し、更に轉じて**明治作家の月旦**となる其間博引旁證、句々苟くもせず、靜思刻縷熟讀すべきあれば、忽ち一氣呵成諷詠落々たるものあり要するに近代の時文を評論せるものなれば又た以て**明治思潮の濃淡深淺干滿の度を測るの料とならん、**誠にこれ斯文に志す者の指南車にして、嚮くも座右を放すべからざるの什寶なり氏が新著**梨園之落葉**も又正に不日弊堂より出版せんとす其大に文壇を驚かさん事は弊堂の堅く信じて疑はざる處なり。

尾崎紅葉撰

俳諧名家選



今や俳諧復興して氣運天を衝くの勢ありと雖も、畢竟十七字の口にし易きに與して、法を知らず、格を辨へず、叨に舌を動してや哉を沙汰するに過ぎざるなり。如此きは牛馬も俳を能するものにあらずや。古の所謂俳諧なるものの何ぞ今の俳諧の如き亂脈無法のものならんや。法を得て而して破れ格に入て後出でよ其法を問はむとせば古人に參すべし、其格を知らんとせば良書を讀むに如かず。爰に俳諧盛時の四傑ありて各諸子に教ふる所あらむとするは俳諧名家選なり、

●紙質佳良●印刷鮮明●白クロース上製●實價金三十錢●郵稅金六錢●並製實價金二十五錢●郵稅金六錢

發行所 東京日本橋區通四丁目角(電話五十一番) 春陽堂

廣告

本誌各號附錄畫『信、望、愛之三佳人』非常の高評あり。なほ増刷せしものあれば、一枚參錢十二枚まで郵税貳錢にて御望の方へ御送附可致候也

女學雜誌社白

毎月二回發行　**自由黨々報**　十月二十五日

十月十日發行

◎**第百拾八號**　定價一部六錢十二部六十六錢廿四部壹圓貳拾錢前金のこと

黨論　◉**松方内閣の罪案**

論説　◉洪水善後の方針とは何ぞ　小室重弘○矛盾内閣　野田翔益○如今政治家の動靜　澤田清之助○制[illegible]的内閣　河村譲

雜錄　◉電光錄　世界は各國の状況を叙す

黨報　は本部の總會より地方の黨務を詳記す

時事　○豫算不足額○清國償金利子の不足○混沌内閣○高島子○司法權の獨立○對外硬の外務大臣○○進歩黨○立往生○郡長公撰問題と東北進歩黨○○田口卯吉氏○新翰長の手腕○新内閣の新政○入權競爭問題等

發行所　東京芝公園　**自由黨々報局**　電話五四七

帝國文學

第二卷第十　明治廿九年十月十日發行

論説

○西廂記を讀む(完)　文學士　笹川種郎
○辭書編纂法幷に日本辭書の沿革(續)　文學士　藤岡勝二
○假字文の起源(上)　武島羽衣

詞藻

○水月鏡影　文學士　大町桂月
○比沼山の歌(第一篇第六章)　文學博士　井上哲次郎
○月の賦　大野洒竹

雜錄

○ダンテが神曲中の自然　柳村
○イワン、ツルゲーネフ　B、S、

文學史料

○『磯の洲崎』に省かれし一章　關根正直

雜報

○内外雜報幷に新著批評數十件

東京市京橋區銀坐一丁目廿二番地　**大日本圖書株式會社**

最近船來　**ベビイ手みしん廣告**

今度新に船來せし「小形手みしん」には左の利益あり
竪八寸、横六寸、深四寸にも足らぬ箱に入れて便利の通運にて配達するとの出來る程なり。
机又は疊などの上に載せ、座して扱ふとを得。車は二本の指にて廻はすとの出來る程なり。
少しも八釜しき音もせれば、至つて上品なり。扱ひ方は極めて手易く、案内書を見て一時間に獨り稽古をすれば、直ちに巧者になるべし。
小供の西洋着又はハンケチ縫ひなごにても、ミシンの無き爲め困却する婦人多し、もし一臺を購入あらば便利至極ならん。

右一臺正價金五圓也運賃は此外也

日本一手賣捌人　エッチ、ゼー、デビソン（横濱居留地五十番）

東京代理店（麹町下六番町六番地）　**女學雜誌社**

女學雜誌 第四百貳拾八號

明治二十九年十月廿五日發兌

社説

基督教界時勢論

吾人が觀る所によれば、我國基督教界方今の形勢は、一言にして盡すべし。曰く、信仰衰へたりと。凡百の痛弊は悉皆此の病元より發す。

人或ひは曰く、新神學の故によりて衰へたりと。然れども、新神學何の故に信仰をして衰へしめたる乎。吾人惟へらく、衰へしめたるは新神學にあらず、衰へたる信仰の人にして新神學を主張するの故のみと。信仰と學理、何の關はりかある。學理を唱道するの人意衷の信念にして動き、則はち初めて信仰と影響するに非ずや。然らば、罪は新神學にあらずして、新神學の人にあり。新神學の人にあらずして、其人の先づ信仰に衰へたるに由る。抑そも凡庸の衆生にして、新神學を解知せしの故に影響するもの幾何かあらんや。新神學の解知しがたきは、舊神學の解知しがたきと相似たり。本來、衆生の歸依確信なるもの、安くんか此邊の消息に存せんや。左らば、知るべし、新神學によりて影響せられしものは、僅少なる神學者に過ぎざることを。而して、此等少數なる神學者の故によりて實際に影響せしとは、恐らく稀薄なるべし。惟ふに世人思料するが如き勢力あるものにあらざりし也。但だ夫れ時世を同うして別に一大勢運の暗躍するものあり、殆んど人々無意識の内に進行して山岳を呑盡すの侵畧を爲せり。此に於てか、人驚ろき見て、新神學家の行爲に重きを爲し、細枝一片の流るるを指ざして、下に洪波激流あるを忘れたり。夫れ、神學の變遷などにて信仰を喪失する程の人士に、何程の大勢力かあらんや。而も況んや其の少數なるをや。世人誤まつて此に大元因を歸すべからず。

人或ひは曰く、旗幟鮮明ならざるが故に衰ろへたりと。凡そ人をして信仰せしむ、簡短にして鮮明なるを可とするは言ふ

を待たずと雖ども、簡短と鮮明とは夫自身に於て信仰を惹起すに足らざることを知らざる可らず。亦た宗教界の事、別に不鮮明、不簡短の故によりて渇仰の念を增すとあるの事實を忘る可らず。左らば則はち、單に旗幟の鮮明なると否とを以て一大事の如く思惟するは寧ろ末なり。たとひ鮮明なりとも、別に強大なる信仰を以て之を活かすにあらざれば、人の信念に影響しては、暗淡不明となるべし、之に屬するもの薄弱にして採るに足らず。若したとひ旗幟不鮮明なりとも、別に猛烈なる信仰を以て之を活かすとあらば、人の信念に影響しては、痛切明快となるべし、之に屬するものは強剛にして亦疑ふとなけん。左れば、軍旅の旗幟に、必しも其色の鮮明なるを期せずして但だ主將の氣の雄ならんとを期するが如く、信條の旗幟も亦た依て以て傳ふる所の主動者の確信を要とす。何んぞ必らずしも、其の簡短ならざると否と、鮮明ならさると否とに關して拘泥すべけんや。故に、たとひ旗幟鮮明ならざるも、傳道者にして氣滿ち信念熱く、傳道の慈悲痛切ならば、教界の事決して衰へまじ。罪を旗幟に嫁せんとする如きは抑そも誤まれり。病元更に一步の先にあり、即はち、信仰衰へたるの故にあらずや。

人或ひは曰く、破邪の氣象銷耗し、排他の精神枯喪したり、徒らに、他宗教と調和折衷せんとなどを力む、傳道は寧ろ競爭によりて進步すべきに、人往々緩漫にして激せず、玆を以て衰へたりと。之も亦た末なり。抑そも、他流を排し、他宗を罵るは、顯正の至誠に激するが故なり。方今もし基督教界に、儒佛を邪なりとし、其の道を僞なりとし、之を撲滅するは則はち基督の御心なりと信ずるものあるか、あらば則はちまつしくらに斷行すへし、これ傳道の至誠、救世の慈悲なり。古の聖賢の他流を打破せしもの、皆な此の愛の發動より起れり。然るに、今の基督教人、儒佛に對して多少の敬意なきはなく、之を以て一種の舊約教に比せんとするもの頗ふる多し。基督曰く、吾は預言者の言を破らんが爲に來らず、之を成就せんが爲に來れりと。則はち、此の聖旨を聞きて、儒佛二教に對する心中の緩和を抱き乍ら、とさらに排他の熱心を裝ほふて、古人の形跡に傚はんとす。古への人は、熱誠の故によりて、他宗の人を燒殺したり、今人毫も此の熱誠なくして、只だ熱誠ありげなる所作に傚はんとするは法士の道なる

か、單に競爭の益を利用せんとする如きは、傳道を事務と心得る俗才の爲すべきヿのみ、救世の慈悲、豈に此邊の刺激によりて動くべきものならんや。左れば知るべし、破邪排他の事なきを憾むは抑そも末なり、何んぞ、先づ其の信に厚からざるヿを歎ぜざる。儒佛二敎と相合ふべきは釋然として合ひ、之と相異なるものは、堅く取つて動かず、而も其の一異信の大いに宣傳々道せざる可らざるものの爲めには、熱烈に勉强す、是れ法士、義を行ふの道にあらずや。左れば、調和折衷の氣運を歎き、破邪排他の慨なきを憂ふるに先だち、法士特得の所信の稀薄なるヿを思はざる可らず。則ち、今の憂ひは要するに信仰の衰ろへたるにある耳。

此他、憂患を諸種の外事因緣に歸するもの多し。曰く、敎會の組織によると。曰く、主權中心の無きによると、曰く、社會的の事業と一致せざるによると。曰く、人物なきによると。抑そも皆な多少の元因にあらずと謂ふヿなしと雖ども、之を以て責めて、他の一大本源に溯つて自から責めざるに至ては、尤とも不可なり。傳道界の不振は、傳道者の不振によるにあらずして何ぞ。信仰界の不信は、信仰主動者の不信によるにあらずして何ぞ。同じく是れ信仰の衰へたるに歸す可き耳。

抑そも、宗敎界の事を思ふ、一種の別眼なかる可らず。苟くも、渴仰歸依の消息と、慈悲救濟の愛憐とを以てして之を考ふるにあらざれば、見る所、戒しむる所、二つながら誤まらざるを得ず。吾人不肖と雖ども、乞ふ其一二を記さん。

人或は曰く、基督敎士の説敎は解するに難し、之れ通俗に入らざるの所以なりと、之れ誤まりなり。通俗の宗敎を信ずるは、其の解し得るが爲にあらず、只だ有がたく、忝けなきと、一種の威力を感ずるとに由る。故に、今の説敎の言語の難きを不可なりとせず、但だ其の崇嚴權威を欠くを不可とす。もし崇嚴にして壓するが如き權威あらば、通俗は寧ろ其の解しがたきの言語あるを以て忝しとなさん、是れ宗敎感情の常態なり。論者往々之を笑はんとするは、抑そも宗敎を知らざるの故なり。吾人が天地に對して崇敬寅畏の至誠を凝らすや、其の不可思議にして靈妙玄奥なるによりて彌よ切なり、此際豈に理解々剖を希圖せんや。寧ろ之あるを以て神聖を減ずるの心地とす。左らば、通俗の説法に聞く、其の解しがた

きを憂へざるの趣味如何の邊に存するかを諒するとを得るなり。吾人が此の一事を言ふは、説法の工夫の爲にするにあらず、他なし、宗教感情と、理解解知の知能との相差ふ所以を示さんが爲めに此の辯ある耳。

凡そ法を傳ふるものは、吾心中に自得せる無上徹底の玄意を傳ふるにあり。基督の使徒曰く、吾得たる者を汝曹に傳ふと。佛家亦た大悟の二字を之に當つ。既に吾之を得たり、之れ即ち無上最大の至寶にして、天落ち地崩るとも尙變ぜざるの確信なり。此の確信は、吾光明にして、吾が生命なり。如何んぞ増減すべく、亦如何んぞ變化すべけん。其の變化し増減するが如く見ゆるものは、修飾禮文の作用にして、中心精髓の異同にはあらず。吾之を抱きて自負し、之を眺めて微笑し、艱難にも、憂患にも、徐むろに懷思して感謝せざるはなし。此の確信や、豈に神學の解釋などにて搖動するものならんや。一期徹底して吾之を得たらん以上は、抑そも如何にして其味ひを忘るべけんや。所交朋友の如何によりて之を變ずるとし、若くは、教會の出席缺席を以て盛衰ある如く思惟するは、笑ふ可き事たり。夫れ既に此の確信あり、則はち、學理の進不進、世情の宜不宜に拘らず、常に宣傳して止む時ある可らず、之れ則はち傳道者の慈悲也。

四

傳道者の慈悲如何に洪大なるや。慈悲は即ち愛なり。然れども、寧ろ愛と言はずして、反つて慈悲と言はん方の多く其の趣意を見めすが如くなりしは、抑そも基督教界の遺憾にあらずや。見よ、傳道者、慈悲の情けに動かざる限りは、其の說法は殆んど効なき也。一切衆生の平安なきに痛み、其のチロ〳〵として浮世にたゞよふを歎き、富貴貧賤同もに是れ一樣の疾苦に悶ゆるを悲しみ、天災あるを知らずして、物我の慘酷に逆遇せらるゝを憂ひ、其の憫れむべき狀態に淚を禁ぜずして、子を慈しみ、友を懷ふが如き慈悲心によりて動くとき、即ち傳道の心あり。不幸にして傳道の人もし此の愛心を欠くとあらば、雄辯博學も遂に効なきに終らん。これ、宗教界の能事にあらざれば也。

亦、今の基督新教は、ルーテルの改革運動の形跡に拘泥し、少しく破邪顯正の態度はありと雖も、崇嚴歸依の所信を惹くもの稀なり。殿堂と言はずして、會堂と言ひ、祈禱讃美に重きを置かずして、辨證解釋の演說を好むが如き、其の弊な

り。但し、我國傳道の當初、儒佛二教に對して宛がらルーテルの徒の爲したらんが如き運動を爲したる頃には、則はち此の方法に恰好の威力ありしが、今の如く着實にして只管ら徳を立て信を修むるとを要とするの教會には不適當となれり。

今にしては、人々宗教心の渴仰する所を察し、寺院を崇嚴にし、祈禱を神聖にし、讃美を高潔にし、主として、寅畏、敬崇、祈願、禮拜等の宗教心に滿足を與へざる可らず。左れど、もし心中充滿の信仰なくして、單に儀式を改ためて此の如くするものあらば、均しく効なきは言を待たず。凡そ宗教心の煥發するや、人の手にて造りたる偶像をも尙ほ禮拜せまく欲す、これ宗教感情の微妙殊勝なる渴仰なり。左れば、信仰內に充滿し、心を崇嚴にして敬まつて禮拜するときや、殿堂も、聖壇も皆な神に近き御座たるの感覺あるべし。只何となく忝けなき心地せられ、涙ホロ／＼と落ちて、感謝の思に禁じがたき、これ宗教者の誠實也。故に、信仰の心先づ隆んにして、謹んで聖座を嚴かにするの至誠、鬱積するにあらざれば、ひとり儀文を崇嚴にするに同じく効なし。

佛者往々、即心即佛の語を唱ふ。基督の人、我を亡ぼして、主に復活し、我一身を擧げて、神の殿堂となす。法士もし此の境界に達して、言行惣じて主の役僕となり、語る所ろ滴々平安の福音を落して、人の腹中の憂悶の地に種まかば、重きを負へるもの、難めるもの、痛めるもの、踵を接して來り聞かんとを求むるなるべし、何んぞ傳道の行はれざるを憂ひん、目を擧れば、田は色づけり、苅入ものは多し、但だ主にありて眞に働らく者の尠なき耳。玆に若し確信にして慈悲の人あらば、宗教的憂悶あらんの人、何すれぞ來りて安慰を求めざらんや。思ふに、今の時は傳道しがたきの時にあらず、只だ眞に傳道する人の乏しき耳。眞に傳道する人の乏しきは何ぞ他なし其の信仰の衰へたる也。

凡そ時機到來して信仰大復興の機會となるや、處女も豫言すべし、小供も豫言すべし。如此き時に於ては、靈動は神秘の聖氣に源由す、何んぞ區々たる個人の傳道者を求めんや。我國近代に在ては、明治五六年、同十六七年の如き稍や此に類したるの時なりき。惟ふに遠からずして復たび此如時機あらんか、吾人は固く其の遠からざるとを信ずるもの也。然れども、此は是れ人事以上の事にして、寧ろ常規をもて論ず可ら

ず、只だ信じて之を待つべきのみ。之を待つて人事を盡さざるは乃はち不可なり。

若し夫れ人事を盡すの方面に於て之を言はば、今の基督教界の痛弊は一に信仰の衰ろへたるに歸すべく、一般信徒の如此く信仰に衰ろへたるは、其罪必竟、傳道者及び牧者其人の信仰衰ろへたるに歸せざる可らず。吾人今にして此等の人士より信仰の談を聞くと稀なり。其の演説と、其の理窟とは、毫も信仰を養ふものにあらず。吾人は寧ろ之を聞かざるを以て信仰に益ありとなす。正統、非正統の爭ひは、信仰、不信仰を以て判せざる可らざるに、彼の人士は徒らに其の名を爭へり。信條の緊節は、信仰の强弱を以て其價を判すべきに、彼の人士は亦徒らに其名を爭へり。甚しきは、外國の補助を謝絶するとの有無、教會の金錢の出道の如何なんどを論爭して、之を以て人の信仰を左右するものとなす。嗚呼何んぞ其の末路に局促して、直ちに靈動の本元に自省せざる如此く甚だしきや。

夫れ一切衆生の宗教に於ける、疑はんとを求めずして、信ぜんとを求むるにあらずや、諸君何故に其の信を與へざる。一切衆生の宗教に於ける、斷乎たる決心を享けんとを祈る、其平安の倚更らに亂されんとにあらず、諸君何故に猛然として決すべきとを教へざる。嗚呼、日本基督教界の時事、豈に他あらんや。衆生は其信仰をかき亂さるゝとを憂ふる耳。之を亂すものは誰ぞ、他なし、傳道者、教師、及び牧師の多數即ち是なり。彼の人士、何んぞ故さらに此の罪を犯さんや、則ち故さらに犯すにあらずと雖ども、自から信仰するを强からずして而して其の職に在るの結果たる即はち然にあらずや。之を是れ顧みず、徒らに弊を餘所に責めて、改革を末路に探らんとするも、何の効かある。次第に信仰なき人を傳道者として、次第に信仰ある人士を教會外に追ひ、忙々然として曰く此の方策如何んと。豈に是れ祝福を受るに堪へんや。吾人惟へらく、一大信仰の人々、其の信仰を以て衆生の煩悶を拂ふにあらざるよりは、他の凡百の手段毫も益なしと。もし此事にして行はれんか、教勢一月ならず靡然として振興せん。衆生は快復を待つもの也、何んぞ故さらに信仰より遠ざからんとは爲んや。

女學

日本女學の大勢

大いに女學の爲に計るものは、亦た先づ大いに我國の大方針に考がへ及ぼさゞる可らず。何にとなれば、女學の振興せざる可らざるは無論にして別に疑ふことを要せずと雖ども、女學の方針と傾向とを如何んかせんの問題に至ては、特に思慮を費やさゞる可らず、即ち、我帝國の大方針に調和するにあらざれば、女學の大事未だひとり論ず可らざれば也。

近代新たに輸入せられし新女學の模範は、多くは北米合衆國に採れり。合衆國の國たる新開拓殖の勢ひにして、移住の新家、婦女子を尊ぶこと格外なり。加ふるに、男子實業に忙はしく修學の餘暇多からず、女性反つて靜かに勉學して、文事往々有髯氏に優ることあり。此に於てか、合衆國の女國たる一種異樣にして、女權極めて隆んに、女職亦多し、未婚の老孃多數ならんことも亦た當然の結果なり。我帝國の新文明は、米國に動かされたること多く、就中、女學界の事を以て其の甚大なるものの一とす。是れ、新日本の女學校は、官私ともに其主動者を米國の感化を受けたる紳士に求めたるの致す所ろとなす。

新日本の女學の氣運は、北米合衆國の感化に動かされたること多し。故に不論不疑の間に其の格調を學び、何等の研究なくして只切りに新女學の擴張を求めたるの觀なきにあらず。

凡そ如何なる時代に於ても、女學なしと云ふは不可なり。幕府德川氏の時代にも亦た時代相應の女學はありし。人の親にして豈に其娘を敎へず、人の夫にして豈に心得なき婦女子を求むるものあらんや。此の自然の要求は即ち女學の刺激にして、因つて玆に如何なるかの女學は之れあり。吾人は舊日本に女學なしとは言はざるもの也。左れど、新日本に入つて女子敎育の科程を一新し、所云る新女學なるものを初めて振起せし偉績に就て之を言はば、是れ未曾有の現象なり。此の未曾有の現象の何によりて多く模範を採りしかと言はば、即ち北米合衆國たることを知る。合衆國によりて只だ何となく動かされ、自づからにして新女學の擴張を絶叫せしば、眞に當世の一

輿論にてありし也。

左れど、今ま仔細に熟慮して、更めて問ふべし。此の新女學の學風は果して帝國將來の大方針に副ふべき乎と。言を換ふれば、主として家政內助の方針に止むることをせず、隆んに女學を伸張して、出來べき丈の高等女學を鼓吹する如きは、吾帝國將來の大勢に伴ふ可き乎と。夫れ、勢の可不可を問はず、人心を敎育して、其の成るべき高度に達せしめんとするは、男女の何れに論なく、惣べて人類開發の目的也。此邊の主旨よりしては、亦た前件に類する疑問を要せず、只だ新日本大躰の普通經綸として、一般の女學を目的とし、之を單に內助の事項に止めざると可なるか否やの問題を、帝國將來の方針に合せて思案せざる可らずとは言ふ。

（二）

此に至つて吾人は帝國將來の大勢を憶測し、前途必らずや左の如き傾向あるべしと信ず。

甲　日本人民は、移住に適せず。本土の風光天下第一にして到る處ろ之を忘る可らざれば也。加ふるに、稟性、氣を以て勝つ、一時の拓殖は其の長所なりと雖ども、遂に久しきに堪ふる能はず、宛がら佛蘭西人の如けん。

乙　日本人移住に適せずと雖ども、荊棘を啓き、不毛を治め、率先拓殖の道を立つるは、其の長所なり。加ふるに仁俠、義に勇む。東方諸國の開拓、及び、革新の事業には、日本人の手を待つと多かるべし。

丙　東方諸州今後大に文明の事業を吸入せんとするに當りては、大抵、日本人の助力を需むべし、需めざるも、日本人は挺身して出掛るなるべし。日本人は使役せらるるに適せざれども、世話を燒くには適當せり。即ち、勞役者にあらずして、監督者たるによし。

丁　此等の理由により、我國の同胞は、今後大いに海外に出稼ぎするなるべし。即ち、殖民としてにあらず、當分の出張として。

戊　此の故に、男子の數は比較的に減じ、其事業も亦た他の手を待つと多きに至らん。吾人が夙に日本は女子國とならんと言ふもの即ち是れ也。

夫れ、日本男子は、將來大に海外に雄飛して、隆んに東方諸州の開拓に從事せざる可らず。若し彼等にして全たく移住

すべきならば、之に伴なひて同行すべき婦女子も亦同様に多かるべしと雖ども、大勢は寧ろ然あらしめざるべし。左らば則はち、國内に留守して出來べき丈け男子の職業に代り、在外男子をして毫も内顧の憂ひなく、自由に海外に運動せしむるは、即はち日本婦女子の大なる内助にはあらずや。

凡そ國家の調和あると、吾が帝國の如きは無し。日本は則ち大和民族の爲の一家の如し。男子此家を出でて、四方に遠征し、盛んに文化の事業に勵精するに當りては、婦人たるもの帝國に留守して、凡百の應務を自から擔當せざる可らざるにあらずや。果して然らば、新日本女學の方針と傾向とは容易に知るべし。亦是れ内助的の天職を果すが爲たるとは言ふ迄もなけれど、其内助たる只だ眇乎孤立の一家の爲にするのみにはあらず、公共の一大家族たる吾日本帝國の家の爲にするもの也。故に、新女學の方針は隆んに之を積極的にして、可成く之を高等の程度に推進せしめざる可らざるは明けし。之を日本女學將來の大勢とす。

女學校の美育

女學校美育の根本の一ツとして、『詩的手藝』の趣味を薫化すべしとは、去る七月刊行の本誌當欄内に於て說述せし所なり。凡そ、美育に要とすべきは、美の趣味の開發にあり。此の趣味の開發は、詩歌を以ても能くすべく、繪畫、音樂を以ても能くすべく、又た單なる談話を以ても能くすべし。必らずしも、其の依つて以て具とするの方便の如何にはあらず。第一に、其の情致を養なひ、其の觀念を攝ろめ、其の鑑識を細かにして、總べて美的趣味の現象に對する同情を濃やかにすることを旨とせざる可らず。此れ美育の第一義なり。

然れども、直ちに想を養ふは難く、形に就て想を養ふは易し。況してや、普通一般の女生、其の識量の未だ深宏ならさるものにありては、先づ有形の方便によりて以て美の想を養なはざる可らず。加之、女子にありては、此の想を施こして有形の事物に用ひ、以て戸内家外の風景を美くしくせざる可らず。他日の實用を慮ばかりても亦た有形事物に付きての美の

敎育は信切ならざる可らず。

此の主旨を以て、今の女學校に普通に行はるるものは幾何ぞと考ふるに、凡そ美育の品は極めて少なし。禮、唱歌、繪畫の三つは、蓋し普ねく行はるべし。新派にありては、特志者に音樂を用ひ、舊派にありては、大抵、茶と花とを用ふ。吾人惟ふに之れ未だ足れりとす可らず。

繪畫は之を畫くヿを敎るのみならず、其の鑑識力を養ふヿを兼ねしめざる可らず、日本畫に於て特に然りとす。故に、普通敎育に於て鉛筆畫の一科を敎ふるとせば、日本畫は、其の鑑識を養ふに於て補なふべし。大抵、古人の名家を傳し、其の傑作を語り、隨時、其の標本を示して、日本畫に對する一と通りの智識と趣味とを養なはざる可らず。今の滔々美術を言ふものも、我國在來の繪畫に對しては、殆んど盲目の如くなる族尠からず、紳士尙ほ之を恥づべし、況してや、婦女子の嗜なみに於てをや。他日、家庭の裝飾に任ずるに於て、心に毫も此邊の趣味なくして、如何で能く日本在來の風雅を示めすヿを得ん。自から爲すヿ能はざる尙可なり、一日他に會して如此き風雅の催しに參し、毫も之を味はふヿ能はずんば、日本の淑女としては、恥なきにあらず。故に、普通敎育としても、普通一と通りは此邊の敎育なかる可らず。

庭園、花圃の園藝も亦た大畧を承知し、其の美を認識する丈けの趣味はなかる可らず。就中、庭園の事は、之を學ばざれば、遂に知るヿ能はじ。日本の作庭は支那印度の傳來にして、高尙なる禪家の趣味を混じ、一石一木の配置にも頗ぶる妙を存ず。少こしく其の消息を解するに至れば、風雅の情懷尋常にあらざる也。たとひ將來如何の新式に其庭を作せんとするものも、幾分此邊の趣味を混ずるにあらざれば滿足するヿ能はじ、何となれば吾等日本人は多年の間、不知不識の際に其の涵養を蒙ぶりたれば也。況してや、前段繪畫に於ける時の如く、若し他に趣きて此般の趣味を解するヿ能はざれば恥多からん、恥は之を忍ぶとするも自から快樂薄きヿにはあらずや。故に、庭園の事、亦た一と通りは學び置かずんばあるべからず。但し、日本の庭園に付きて學ぶと同に、外國の庭園の事も概畧を知り置くべし。何んとなれば、此れ外國の庭園にはあらず、既に滔々我國内に流行し來らんとすれば也。」現に、音樂、又は、茶、花を學ぶものには其要なけれど、若

し此等の學科を兼修せざるものは、其の大躰を學び、其の趣味の存する所ろを略ぼ了解せざる可らず。日本にても外國にても、音樂は、美術の屈強なるもの也。たとひ自分には其の嗜みなしとも、之を聞きて其美を鑑識する丈の素養はなかる可らず。ことに、茶と花とは、日本舊來の美術思想の淵積する所ろなり、必らずや、其の一斑は知らざる可らず。

大凡そ此等の諸科を普通敎育に實施するに當りては、甚はだ困難なりと言ふものあらん。左れど、京府には繪畫の展覽會あり、田舍に入つては、舊家多く珍幅名畫を藏す、時に之に就きて實地の評論を聞かしむるは易ゝなり。庭園も亦然り、各所の作庭を見めして、其長短佳否を評し、かの一石は何の故に佳なる、かの一木は何の故に見悪くきなど敎示せば、解悟左程に難からじ。音樂、茶、花に至つては、實地大躰の薫化を與ふるヿ、一層容易すからずや。

吾人は、今の女學の殺風景に傾むき易きを歎ずるヿ淺からず。此の點に於ては、今の女學むしろ古の女學に劣らんとはすらん。當路の人三省せずんばある可らざる也。

小兒の天才

曲浦生

普通敎育の目的たる、多面多方に、圓滿完全なる人間を養成せんとするに在りて、而してまた學校の敎育は、實に此目的を執り行はんとするが主旨なり。殊に、多人數を一講堂に入れて、同時に敎育するヿにてあるなれば、彼此の所長、天才に別々の注意を與へ、個ゝそれ〳〵の敎育をなし、之を發達せしむるものには非らず。故に天才あるものゝ爲めには、今日の學校敎育は、甚だ不利なるヿありと雖も、こは致し方なきヿにて、學校普通敎育なるものは、到底凡人を標準とせざるヿ能はずして、天才を顧りみるに遑有らざるなり。

天才なるものが、學校敎育の爲めに苦しみ、それが爲めに折角の發達が妨げられ、而して其妨げにも打勝ちて、大に發達するものはあれども、またそれが爲めに、其發達を見ずしてやむもの、必ずや多からん。天才發達の助長は、之を學校敎育に望むべからずとせば如何、即ち之を望むべきは、實に家庭に在りとす。然るにまた其家庭なるものが、小兒の天才の存する所長の點を喜ばずして、兎や角して之を害し、之を

妨げんとすると多し。其實例は、吾等名々の屢々見聞する處にして、また古來多くの天才が、其成育發達し來りたる經歷中にて、多くきく處ならずや。而してこれ等後世にも傳へられ、其天才を遂げたるやうの人物は、幸に家庭や、學校や其他の妨害に首尾よく、打勝ち終せたるものなれども、不幸なるは天才所長ありし身も、これを害せられ之を賊はれ、發達成長の期なくして、爲めに一生碌々の世渡りをなすの苦しみをなすもの世には幾許人なるべきぞ。もしこれを勘定し得んとならば、亡びたるの天才は、生きて其働きをなしたる天才に比べて、何千倍、何万倍の多きに居るべきとぞ。畫を描くの天才を有したる小兒が、其所長の點が、父母に喜ばれずして、父母が樣々の方便を以て、之を害せんとし、其小兒より紙筆を奪へば、小兒は之に苦しみ、父母が嚴命の怖しからぬにてはなけれども天才の存する所は禁じ難くして、瓦や壁や塀に樂書きしつゝ竊に其所長を養成しつゝ九死一生の塲合にも、切り拔けて、大畫家となりたる人もあれど、また之が爲に打死したる、名を成さず、家を成さゞりし、未熟の大畫家は、古往今來地上地下に其不幸を呻吟しつゝあるもの甚だ多きに居る。また彫刻家、詩人、文人、音樂者、製造家、商業家、政治家、軍畧家などの天才が、同樣の苦難を受けて、遂げたるもあり、遂げざるもあり、其遂げたるは、偉勳を世に樹て、芳名を不朽に傳ふ。其遂げざるに至りては、身に益なく、世に功なく、後に名なし、悲しむべきかな。

抑も何が故に、兒童が天才の所長と、父母の希望とが相背馳するとの世には多き事なるぞ。例へば其子詩才の天禀あり、而して父母これを知らずして、これに乾燥なる法律を强ふ、されど此子は遂に法律を以て成功するものに非らざるなり。子は畫道の天才あり、然るに父母之に醫たるを要求す。而して彼は到底醫に於て成功するものに非らざる之。其子は音樂の天禀なり、然るに父母はこれに農學を强ふ。而して彼は畢竟農學を以て成功するものに非らざる也。

甚だしき例に至りては、考へのなき父母が、昔ならば祿取り、今ならば月給取りに、小兒を仕立てんとて、其天禀の所長を惡むものあり。如斯きは天才が世に處して、其成功の發途に先だちて、受くべく、經べきの困苦鍛練なるべし。されどこの困苦鍛練に打勝たぬ程の天才とても、よく之を保護し、よ

く之を養育せんには、或は千辛万苦功成り名遂げたる天才と其肩を比すべきものともなり得べからんに、學校といひ、殊に父母といふ强力の敵の大打擊に耐へ兼ねて、打負くるとの如何に哀れならずや。既に其天才を亡ぼして、碌々無用の一生が、これ父母が其小兒に授くるの賜なるとならんには、殘忍も亦甚だしといふべし。啻に其子に殘忍なるのみならず、また社會の不利なるや、決して些少に非らざるなり。

小兒が天才の由來する處、實は何處にありや、是と定めて言ひ難きなり。父母祖先の遺傳を受けて、長じて其所長を露はすものもあるべし。また幼時の境遇或は朋友等の感化によりて、特別の所長を受るものもあるべし。而して如何なる小兒も、白痴瘋癲者ならぬ限り、よし大小の差はあれ、各一ッ宛の所長の才能を有せざるはなけん。この天才の存する處は、即ち其小兒がゆく〳〵世に有用の生涯を營み、功を立て、名を成すの道なれば、父母たるものはよく之を察して、之を保護し、養成せざるべからず。焉ぞ漫に其天才に反するの希望を以て、小兒に擬し、彼を苦しめ、彼の將來を誤らしむるとに忍なるべけんや。素より父母たるものが其小兒を、何に仕

たし、かにあれしと思ふは、實に彼等をして、身を立て、家を興し、世を益するものたらしめんとの希望にして、其希望が會々以て、小兒の天才に反し、之を害するとありとも、決して殘忍の所業とは思ひ寄らざるが常なれども、一思再考すれば、さる事情の生ずると、まとに殘酷の所業なるを曉るべく、以て甚だ注意せずんばあらざるなり。父母の希望といふものは素より其小兒が爲めの利を思ふに外ならざれば、若し其希望の彼等が第一の所長と反し、其天才を妨ぐる事ともなるを知らん其時、速に之を棄てゝ、其天才の保護養成に注意せんとや、これ父母が小兒に對するの眞の慈悲にして、また其希望を其天稟の所長にこそ繫ぐべきとなれ。こは又實に父母其小兒を敎訓養育するに盡くすべきの責任なりとす。

扨て天才に注意せずして、小兒の發達を害するとは甚だ多き世のためしなるが、また天才にあまり注意し過ぎて却て之を害するとあるも、また世に多かるとなり。乃ち彼神童と稱ふるものが、年長じては、全くの凡人にも異ならぬ様ともなるは、其者の天才が、あまり人々を驚かす結果、これに强ふるに度外の發達を以てし、チヤホヤ持て囃し、其神童も亦乘氣

になつて、早熟に終はるが故なり。神童の如き天才の甚だ速に顕呈するものは、之に注意すると、寧ろ制限を加へつゝ却て晩成を期するに在りとす。それ位にて丁度よき都合に成り行くものなり。兎に角天才を養成保護するの要決は、偏に其所長をのみ早く〳〵と發達せしめんとはすべからず、如斯きは即ち早熟不完全なるに終らしむるの虞あれば、或は奬め或は制し、これに十分なる普通敎育をも受けしむべし。天才もまた學校敎育を要するなり、天才を養成すると決して其早成を冀ふべからず。これに多分の素養を供し、完全なる發達をなさしむべし。大なる天才は如斯くにして成るべし。早熟の天才は、小才小品のやからとなりて、世に大用なし。考へ來れば天才を敎育するの法また難い哉。父母たるものが、之に注意して小兒に養成するの勞また大なりと稱すべく、而も其勞は遂に辭すべきのものに非らざるなり。其勞に飽まで任じたるが上にての失敗は、猶恕すべし、然れども之に反して其天才を虐遇して、小兒が將來を不幸ならしめ、彼等をして其残忍を恨怨せしむるとありては、父母たるもの丶罪頗る大ならずんばあらず。

○産婆

外國にては産婆條例の制定せられて、産婆に對して充分なる取締をなす處もあれど、我國の如きは不完全なる布達及び刑法上の制裁を除きては、別に産婆に關する取締規則といふべきものなし。明治元年十一月内務省達に、産婆にして賣藥の世話をなし、或は墮胎の取扱ひ等をなすものあれば、屹度告むべき旨を發せしより明治八年五月文部省が醫制の發布をなしたるが中に、産婆に關する規則ありて産婆は四十才以上の婦女に限る事、産婆は婦生理解剖等の學に通じ産科的技術を備ふる事、産婆は一定の試驗を經內務省の免状を受くる事、産婆の謝禮は申合の上一定する事、産婆は器械藥物等を用ゆ可らざる事等の箇條を設たれども中には當時實行する能はざるものありて、目今廢止の姿となりたり。左れども今日の産婆試驗は全く此醫制に胚胎したるものにて、假免状の制度も亦此時に於て定められ即ち、從來開業せる産婆は府縣にて簡易なる試驗をなし、其地限りの假免状を與ふることになしたり。這は只だ一時の便法にて正則的産婆の出づるを待ちて廢せらる筈なりしに、正則的産婆の意外に少なき故、二十年間を經たる今日に至る迄、尚ほ此規則を存するなり。

産婆の養成は明治九年九月東京府にて産婆術の敎授及び同術試驗の爲め、東京府病院內に産婆敎授所を設立し、同年十一月初めて、産婆志望者三十名を募集したるを始めとし、現今東京にて此術を敎授する處の主なるは醫科大學産婆講習所、東京産婆學校、東京産婆講習所なり。醫科大學産婆講習所の生徒たらんとするものは、年齢二十二才以上にて、普通讀書の出來得るものならばよろしく、卒業期限は十ヶ月なり。此講習所にて養成する産婆は年々四十名內外にして、一ヶ月の授業料は五十錢なり。此校には寄宿舍の設けなし。此講習所の卒業生は無試驗にて産婆免状を得らるゝの特典あり。

東京産婆學校は産科醫櫻井郁二郎氏の私設にかゝる、日本橋區濱町二丁目櫻井産科病院內に在り。此校の修業期限は一ヶ年にして、講莚は一週六時間即ち火木土の三日に二時間宛開講す。經費は束脩一圓五十錢、毎月七十五錢並びに敎場費十錢を要す。此校には寄宿舍の設けありて、費用一ヶ月三圓五十錢。目下の在學生徒は二十四名、入學生の年齢は、滿十六才以上、別に入學試驗もなければ、亦入

學の期限もなし。

東京産婆講習所は神田駿河臺袋町東京産科婦人科病院内に在り。醫學士増田知正氏の設立せしものなり。修業期限は六ヶ月にして、入學生の年齢は滿十六才以上に限り、學力は尋常小學科の卒業生なれば足れり。經費は束脩一圓五十錢、月謝一圓、寄宿費三圓六十錢なり。

産婆學教授の科目としては左に東京産婆學校の學科目を擧げん。

解剖學、生理學、妊娠論、産科診察法、攝生法、正規分娩論、正規産褥論、初生兒の取扱、異常妊娠論、異常分娩論、産褥經過異常附産婆心得摸型演習、育兒法病學大意、看護法及實地演習

産婆の報酬には一定の制限なけれども普通安産にて五十錢若し難産なれば其模樣に依りて多額の報酬を得べし妊娠の有無を鑑定するは普通三十錢にて其上は各自の適宜なれば或は五十錢を差出すものあり或は一圓を差出すものありて其收得は確かならず尚ほ産婆には職務に對する報酬の外謝禮として多額の金員を送るものありて常に貴紳の邸に出入する産婆の如きは其收入の多きこと平凡なる醫師の及ぶ所にあらず市内にて立派なる門戸を張りて多數の門下生を養成し有福なる生活をなすもの十數名に下らず就中神田駿河臺なる原八重子の如きは産婆社會の牛耳を執りて名望頗る高しと云ふ。

以上『報知新聞』に依る

評論

熱誠と偏執とは同じからず

嘗て某大會に臨みて幾多の名士の演説を聞くに、中に少年氣鋭の人あり慨然として激勵すらく、看よ、ルーテルも片輪にあらずや、吉田松陰も片輪にあらずや、片輪にあらずして何んの改革ぞ、諸君安くんぞ斷じて偏執せざると。聽衆やゝ動く。余密かに歎して曰く、之れ即ち片輪者の識見なり、如何んぞ大なるを得んと。

近時世情太率ね輕軟、人々頗ぶる淺膚に流る、正大剛健の説を聞かざると久し。時に之を慨するものあれば輒ち言はく、寧ろ偏執すべし、圓滿を期圖す可らずと。之を以て自ら熱誠を任ずるに至つては亦た痛歎を値ひせずや。

今人やゝもすれば古人の形跡に泥んで其の精神を察せず、識鑑こゝを以て多くは誤まる。大凡そ一代の風雲を叱咤し、蓋世の革新を叫破したるものは、素と已を得ざるに起てり。抑そも積弊鬱結して世態人情の陋極するや、打破して警醒する所ろ自から激烈ならざるを得ず。病弊既に偏執の故に由るを以て、之を改たむるの調自から僻せざるを得ず。外觀圓滿を欠ぎ單に局部に傾屈するの躰あらんは言ふを待たざる也。然れども、此の外相に惑はされて、圓滿を非とし、常に偏執局僻して初めて能く力あるものの如く思惟するに至つては、其見、痴たるを免れざる也。

夫れ圓滿とは想に付きて言ふ、形の滿圓なるを期するに非ざる也。凡そ古來何如んの激烈の子ありと雖ども、其慨然として革新を叫破する時に當りて、自から意識して其識見を偏執なりとするものあらんや。あらば則ち自から歎きて故さらに神聖の事業を製造せんとする者のみ、安くんぞ之を熱誠の人と謂ふとを得ん。但だ夫れ其の形跡の偏せるが故に、後人之を見て其の偏したるを當初の主旨とし、素と偏するとを甘んぜしが故に則ち初めて其の激烈ありしと誤解す。是れ小人、大人を誤まるの常態なり。凡そ後人見て如何んの片輪とし、如何んの偏執者となすものと雖ども、其人にして若し熱誠積信の士なりせば、當時自から意識して「我偏せり」と思惟せんや。彼士惟へらく「道此外になし」と。則ち猛然斷じて鬼神を避けず、熱狂激昂して水火を踏まんとす、其の意自ら信じて此れ無上圓滿の大光道なりとするに非んば、安くんぞ能く斯の如くならんや。

凡そ大人の起つや、素と已むを得ざるの感に激せしなり。好む所ろは明月にあり、樂しむ所は山川に存す、何すれぞ故さらに平地、波を起して、自から進んで、所謂ゆる事業なるものを製造せんや。英雄と奸雄と岐るる所、此にあり。傑士と俗才と異る所亦玆にあり。夫れ大人既に自から好んで事を起さず、希ふ所ろは、蒼生同胞の平安にあり。所謂る事業なるものの價値幾何ぞと達觀し、榮枯盛衰の實相は偏に浮表一枚の變化に過ぎざるとを知れり。何をもて拘々として故なく波瀾を惹起するとを爲さんや。但だ夫れ世態の變調其の極に傾むけるに慨し、人靈塗炭に苦しみ、同胞皆な危ふきに痛み、則ち悲叫して其の救濟に任ぜんとする耳。此を以て、大人の起るや、其の時勢の需要に隨がひて運動の形を變ず。或ひは、英雄たり、或ひは、法士たり、或ひは、文學者たり、或ひは、經濟家たり。或る時は、政治に於て、或る時は、軍事に於て、或る時は、大發見に於て、又或る時は大模倣に於て、只だ隨時の必要に應じ其姿を易ふ。彼等素と世の爲に起つ、豈に夫れ世の爲に姿をやつさざらんや。法士の衣と、英雄の鎧とを見て、此れ相違ふとのみ言はんは、小兒の事のみ。達士は素より達觀せざる可らず。

故に、大人起つて事に當るの感慨を察し、其の同情の激する所に心耳を附して、直ちに熱血の迸ばしる所に聽け。脈々た

る鼓動は如何んか語る。豈に夫れ自ら偏執を許して故さらに我見を貫ぬかんとするの小事故ならんや。大人の胸宇濶如として天地の如し、識見六合に渉りて、圓滿具通せり、融通自在、朗々乎として障礙なし。但だ之を施こして則ち一世の一事に適當せしむる耳。此に於てか、後人其の事業の形跡に驚ろき、大なる片輪の偏執せる熱心として賛歎し、相数へて曰く、片輪にあらずんば、大事成す可らず、偏執にあらずんば、一事を貫ぬく可らずと。嗚呼、何んぞ其の見の迂なるや。』大凡そ、大事は天地の力を綜合して後ち遂行す。如何なる偉人も必竟、心外秘密の十大靈氣に感動せられし耳。時所位、妙和し、心身、天地、相抱き、靈能閃めき、光明一射して、蹶然として、神の人起つ。世人其の起てるを見て之を壯んなりとし、而も、事前の痛苦、祈禱、自戒、默修の慘憺たる者あるを察せず。故に、識鑑悉とく誤まる。

誰か圓滿より發せずして、圓滿の事業に益ありと言ふ。誰か熱誠より發せずして、熱誠の事業に益ありと言ふ。彼の自から偏執を意識して而して强ひて之を誇らんとするが如きは、天の力に生活するものにあらず、只だ自我の妄見に呼息するもの也。吾人は之を小なりとす、安くんぞ欽するに足らんや。古人歌ふて曰く、圓ろくとも一角あれと。此れを至大の悟とす。圓滿の想、熱誠に動きて、救世の事業を爲すや、事業の形跡は、即ち一角のみ、即ち一局のみ。其の僻して熱するの躰を見ば、或は人稱して片輪の如しと言はん哉。然れども、此れ大圓和滿の妙奥より發現せる一形象とは知らずや。圓ろくして角あるは善し。元來、角にして亦た角ならんとするは即ち只だ陋たる偏執の子に非ずや。

墓地

靈性的公園としての觀察

妙味は睡不睡の間にあり、幽意は生不生の界に存す。死に隣る一歩、三寸息斷るの翌、悄然として孤行閑寂に堪ふまじきは、夫れ墳墓に立つものの感か。

故に、墳墓は宗教感念の發現にして、又た其の脩養なり。人もし玆に詣して殊勝に禮拜するとを爲せば、一道の幽意、明暗二界の間より發して、雲の岫を出るが如く、忽ち理念智解

を包んで、彷彿として一種超越の靈界に參せしむ。

三田の福翁曰く、余が如きは宗教心の少なきものなるべし、然れども、祖先の墳墓を拜して合掌する時や、異樣特別の感想を發して、比類なき殊勝の思あり、殆んど自ら解しがたき程なりと。是ち即れ人々常識の眞實を代言したるもの。單に福翁個人の一說として見去るべからず。

墓地は夫れ宗教心涵養の靈場なり。たとひ六萬の寺院、劣僧に充てりと言ふものありとも、彼の靈塲が無言の說法を爲して、暗に密に衆生の靈氣を脩養せしめたると蓋し意量の外に出でん。人ありて近世尤とも崇嚴なる殿堂を何處なるぞと問ふあらば、吾人は、累々たる石塔の半ば打ち半ば倒れ、古蔦老草の礎を沒して白弔燈の獨り雨に破るる邊りを指ざし、寧ろ則ち是なりと答へん。

左れど、文化、市町村の制度を變へ、公共一切の組織大に面目を改むるの日、就中、公衆衛生の事業彌よ周密となるに及べば、古來の寺院墓地は遠からずして其の制度を一變せざる可らず。他なし、公共墓地なるもの、全國各所に設置せられざる可らず。

抑そも、共同公園ある時代は即ち公共墓地ある可きの時代なり。其の公園は社會上の和樂に供へ、其の墓地は宗教上の平安に備ふ。一つは以て健全にして光明ある遊樂の情を滿たし、他は以て幽遠にして悲慘なる哀慕の念を安んず。故に、公園の社會上共同の爲に莫る可らざるが如く、墓地は宗教上同情の爲に莫る可らず。同もに之を公共の組織となすは、公共組織の時代に於て莫る可らざるの事とす。斷じて其一を欠くとある可らざるなり。

然れども、世人往々共同公園の必要を說きて、未だ共同墓地の必要を說かず。偶ま之を言ふものも、共同墓地の靈性的公園たるの由緣を說かず。是を以て兩々相關、同時一進の秘義を言ふもの稀なり。

吾人は頗ぶる靈性的公園の必要を感じ、其の制度と、脩飾との、大研究に値ひすべきことを察し、久く墓地美術とも稱すべき審美論に着眼す。世上大方の所說を聞んとするは亦切なり。

共同墓地設置せられなば、之が管理人として幾多の僧侶を招くべし。既に招聘せられたる僧侶は、其の僧籍を脫して單に管理人たるとは勿論なりと雖ども、彼の無言大說法の偉人た

る靈性的公園を理するは即ち宗教上の一大傳道なり。僧侶たるもの、其の終を克くすと云はん、何んぞ之を異なりとせんや。

今の新宗教家(例せば基督教徒の如き)、佛界の僧侶を視て惣べて之を佛教徒となし、直ちに自家新宗教の敵と言ふは狹隘の識見たるを免れず。彼等を目して一概に釋尊の徒となす可らず、寧ろ、日本從來の宗教器關に勤務せし先役として待遇すべし。六万の寺院、高僧智識の少からざるは言ふ迄もなし、眞に釋尊の徒弟にして佛氏の傳法に一身を獻ずるものあらんとは、誰か疑はんや。但夫れ佛教即ち在來の准國教たりしが故に、凡そ種々の必要によつて教界に遁世せざる可らざりし多數の薄運者は、其の釋尊の教たると否とに關せず、只だ寺院たるが故に來り托せしもの頗ぶる多し。而して之に類似せるものの頗ぶる多からんとは、今の佛教界の實況なり。新宗教家たるもの、何んぞ拘々として之を他流異宗とはなさんとするぞ。暫らく破邪顯正の智見を穩やかにして、徐に人の生活の實相に念想し、以て公平なる慈愛同情の着眼なかる可らず。

德川氏の幕府破れて王政維新の政府新に成るや、幕府の人を見て敵の如く爲せしものあり、幕政を見て王政の敵と見做せしものあり。則ち是れ幕政は幕府時代の日本の政事にして、幕人は之に從事せし先役たるとを看破せず、識見狹少、度量濶大ならず、以て多くの失政を惹起せる所以なり。近來の大水の如き亦た其の一事例にあらずや。嗚呼政海は倘ほ恕すべし、慈悲仁愛を旨とすべき宗教界に於ては、復び此の偏少の識量に誤られて、他の覆轍と末路を同うすることある可けんや。

吾人は信ず。靈性的公園の設置、及び、脩飾完きを得ば、國民の普通宗教觀念は大いに涵養せらるべし。又、僧侶多數の方向も其の所を得べしと。不幸にして此事成らずんば、國民性情の普通教育には一半の欠點を存し、新宗教布興の前途には無益なる障害を蒙ぶるべしと。教界の識者審かに考案せずんばある可らず。

いにしへを月にさはるゝ心地して
ふしめがちにもなる今よひかな

教育

官學及私學

鷗村

官學の弊害たる、頗る厭ふべきものあり。彼赤門の傲慢なる、また彼の茗溪の因循なる、且つ弊習相受けて、自餘の各種學校に及べる、而して孰れも共に甚たしき官人風の臭味あるとや、之を痛論切議する有志が聲は、既に久しきに亘りて聞ゆ。

然れども官學の事たる、由來此弊害を釀成すべき素因を有せり。何ぞや即ち、其成立の性質をいはゞ、皆これ官府の事業なり、其敎員の性質を問はゞ、皆これ國費中より月給を頂戴するの官吏なり。商人には商人根性あり、官員には官員根性あり、滔々たる凡機免れ難きは此根性なり。さる官吏にして、官業に從事する以上、其處に官臭あるは自然の事にして、學生隨て其風に感染せる、數のやみ難きあり。特に官費を以て養成せられ、または、早く官途に因緣して、生涯食祿の俸を獲んと欲する多くの學生の如きは、俗吏根性の由來正に深きものありといふべし。今日官學の根本的弊害は、即ち其敎育の先づ主義精神を問はずして、既に豫算あるに在り、事務あるに在り。未だ其敎員の修練德行をいはざるに、既に官職あるに在り、位階あるに在り、詮ずるに、彼敎員輩の敎育事業なるものは、即ち官職に對する事務の執行なり。』

官學の弊は由來其成立の性質に根蔕を有せるが故に、畢竟排除し難きものあり。されど詮議すれば、其弊害も數多きとながら、今日我邦の形勢にては、眞面目に規則立ちたるまた高等なる學藝を研究せんとするには、止むなく彼處に出入せざるべからず。國內素より數千万の私立學校を有す。然れども各之を其程度に準じて、官學と比較するに、よく後者と優劣を競ふに足るものあるなく、而も今日滔々たる私學みなこれ官學の後塵を拜せんとを欲して、なほ未だ及ばざると遠きものなり。今夫れ弊害の存する所によりて之を論ぜんとせば、豈にたゞに官學をのみいはんや。私學の弊害の甚たしきは、實に敎育上國家の爲に憂ふべしとなす。某文相の時代には、私立學校の撲滅てふもの唱へられしとありしが、當時吾人は、寧ろ彼撲滅論に贊同す

るの志を有したりき。

夫れ私學の重んずべきは、主義によりて成立し、德行を以て薫育し、自由の敎育を與ふるを以て第一の根底となすに在り。何處の私立學校とても、これを主義とすと告白せざるはなけん。然れども其事實果して如何。諺に羊頭を懸けて狗肉を賣るてふことあり。今の多くの私立學校は此罪に陷らんとす。官學に官人主義ありとせば、多くの私立學校には商賣主義あり。幾多の私立專門學校なるものを見よ。生徒の能不能、達不達は、關する處に非ず。月幾圓の月謝を納むれば、講義の聽講の出來ること、店頭に講義錄を購ふと異なることなし。學生の德行の監督など殆ど預り知る處に非ず、また彼等の爲めに學校生涯の面白味なんどあることなし。また彼私立中學校の如き、成べく多數の生徒を得んとするに急なることや、其中學制度を採用して、徵兵猶豫の特權を與へられたる、また何々官立學校へは無試驗入學をなし得べし、又、何々校の入學試驗には、當校出身のもの何十人合格したりと大々的の廣告をなすを見ること、如何にも淺間敷き沙汰なりといふべし。彼等の主義は飽くまで官立に擬せんとすることなり。私立學校たるの

特色は、入學試驗の頗る疎鹵なると、學科の不整頓なるとに在り。彼等に入り來る多くの生徒は、官立學校に入學せんとして失敗したるものと、某々官立學校へ無試驗にて入學なし得ることもやとの僥倖を希望するものとなり。入學手續の雜作なきことより、生徒の此處に不滿なれば、彼處に移り、移動の間に時日を銷するもの多し。私立學校が攝取不捨の方針は曾々以て、學生を誤らしむるに足ること決して些少に非るなり。

今の世の私立學校と稱するもの、其多くは類似官立學校なり、官立校に擬して、逈に及ばざるものなり。此種學校の設立、いと容易し。官規を遵奉して、幾許の資本と、幾許の免狀持との敎員とを有せば可なり。校舍の壯麗と、新聞紙の廣告とは、多くの生徒を集むるに足れり。然れども私立學校の眞の特色たる、一の人物を中心とし、一箇の主義を確守して、成立するものに至りて、方今吾人の之を見ること甚だ乏しきを嘆ず。會々之れ有りと雖も、さるものは必ず資金に乏しく、十分に規模を張り、完全の組織を立つること能はず。我邦の富豪の如き、一夜の置酒高會に千万金を浪費することに吝かならずと雖も、敎育の爲めには、一金を投するだに快しとせずし

て、彼米國の富豪が獨力大學を起し、或はまた死後數百万金を遺して、學校に寄附するが如き其芳志は、夢にだに見るヿなきが爲めに、善良なる眞の私立學校の興起は頗る困難なる次第となれり。

今日の私立學校は、吾人の見て、實に不滿足に堪へざる處のものなり。私立學校其數多く、中には隨分年數も古く、巍々たる大厦高樓の建築物を有するものありと雖も、彼官學に對して、私學の重きをなすもの、果して何處にありや。吁一ヿして其有るヿなきを痛嘆せずんばあらず。彼基督敎主義の學校なるものは、堂々他流に秀づる敎育の主義を持し、有德の人物ありて育英の任に當るあり。此點より見れば、私學中尤も重んずべきの資格ありて、實際又、此特色を發揮したるヿも尠からずと雖も、其現况たる如何。由來基督敎主義の學校たるや、其德育は頗る欣慕すべきものなりと雖も、智育の點に至りては、甚た不充分なる廉多く、其成立を托する處の外國傳道會社は、傳道の爲に金力を使用するヿに專らにして、敎育務に普通敎育に重きを置くヿ少きが上に、兎角合力の日本人か、其實權を握らんヿを欲するによりて、外人等退々に手を縮めて、發達進步を見るヿ少し。且や其特長たる英語敎育の衰退以來、此種の學校は萎微振はず、零落今日に極る。是に於てか彼等の豹變して、尋常中學制度を服膺して、其筋の特認を受けたるもの多し。未だ此變化を勇斷する能はざるものは、外人との折合が付かぬ故に、止むなく在來の儘に過ごし居れども、實際は一日も早く變象せんヿを欲せる比々皆然らざるはなけん。而して變象の結果如何にといふに、成績他の私立中學に比して、優れりといふヿ能はず、生徒の增加も極めて捗々しからず。而して此變象の爲めに、在來の價値を下落せしめたるや疑ひもなし。尋常中學制度を採用したるが爲めには、兼て耐難固執したる聖經の敎育をも犧牲としたるなり。論者は此變象を以て、國民の敎育に從事する以上、必然の要務と信ぜり。然れども其實際は、其特色の既に世の信用を繫ぐ能はざるが上に、万事不完全にして、生徒の員數減小するを拒がん爲めの窮策に外ならず。變象夫れ可なり、然らば、其新たなる方針を以て、銳意進步し、大に私學の面目を張るべし。然るに資力足らず、其誇りたる精神的敎育漸々に勢ひを失ひ、たゞ〳〵彼類似官立學校のまた類似者とな

りて、面目頗る擧がらざるものとなり了せり。此狀態を觀察して、吾人は轉た基督敎主義學校の爲に嘆息せざるを得ず。彼等たるものは固有の主義を確守し、在來の特色を成育煥發せしめ、敎育界に特異の旗幟を飜がへしてこそ、推重すべく、また信用せらるべけれ。何ぞ必しも官規の制度を服膺するに及ばんや。彼憫むべくも不自由なる制裁の下に、官制を採用せんよりは、何ぞ其尤も自由なる區域内に在りて、嶄平たる敎育主義の實行を企てざる。官規の制度によらずんば、國民の敎育はなし難きものなりなどゝの、氣の毒なる迷想を有するものあらば、こは尤も自由なる思想によりて成長したりと認めらるべき、基督敎界の人士に不似合の事といはざるを得ず。假令曩に吾黨の論じたるが如くに、基督敎主義學校が、純然たる外人敎育の學校とならんにも、國民の敎育たることに於て毫も差支へなきことゝ信ず。國民敎育てふ曖昧なる語に蠱惑せられて、官制を遵奉することを以て、完全なる敎育主義となすが如きこと、吾人は之を、基督敎主義の學校に於て取る能はざるなり。

尤も多くの主義と精神とを有するを以て許さるべき、基督敎主義學校は、やうやくに其特色を失つて、混々たる世流に合せんことを是れつとめて、光彩少しも發揮せず。他の多くの類似官立學校の、私學として重んずべき特色を有せず、其弊害の學生をして、不規律、疎鹵に流れしめて、しかして彼等が學業の方針を誤らしむるなんど、敎育界の痛恨事なりといふべし。官學の弊既に厭ふべし、然れども私學の更に振はずして其弊風多きこと、正に當今の憂憤事ならずとせんや。

寄宿舍敎育

志士天下の志あり、人才の薰陶を以て任となし、多年懷抱の主義を發き、積日鍛練の精神を抽きて、一私學を起さんとするものありとせん。有志之を贊同するものあり、爲に資力足らざるなきを獲ば幸なり。然れども其志の世と合せざるは、志士常に困厄を舐むるの處、假令一旦開校の喜びを見ることあらんも、日進むにしたがひて、資用の需要やゝに增加して而し供給常に滿足なるを致さず、彼人の志望十に八九は、これが爲に遂げず。またよしや資力十分ならんも、學校の事

業は獨力のよく成し得る所に非ずして、多くの教員を雇用すべく、又其他に多端なる事務の繁忙なるありて、希望甚だ達せず、事業盛運に乘じて擴張すれば、する程に手は屆かず、心は及ばず、盛業の後には、更に多くの失望ありて而して、彼志士が中宵の沈思、必すや自ら二三子を膝下に親教するとの、無乃遙に、如今の事業に優れるを感せんとす。さらば況んや、事業甚だ擧らざるの時に於てや。

一學校の創設は、極めて難事なり。然るに子女育英の事業必ずしも新たに學校の設立を要とせず。殊に都會の地に在りて然るを見る。學藝を教授するが爲めには、幾多の良學校のあるあり。今新設せんとしても、仲々に多年の日子と經驗とを積みたるものに及ぶべくも非ず。今の教育の缺乏は、學藝教育の缺乏に非らずして精神教育の缺乏なり。この缺乏を補はんとには、良好の寄宿舍を設くると、創設維持に容易くして、而も其功大なるものあらん。今一人の志厚く德高き教育家ありて、一箇の寄宿舍を起し、幾十人の學生を集めて、之を監督し、而して學生は各任意の學校に撰んで入學せしめて、學藝を勉强せしむべく、尤も學生の志未だ堅固ならざるも

のは、彼此と迷ひて、幾度かも學校を替へて見、其間に時日を浪費するの弊あるものなれば、よく種々なる學校の性質價値を明らめて、彼等學業の爲めに助言者となるべく、彼等寄宿生の精神的教育に至りては、自ら之に任じて、万端の品行に注意し、人道天理を講じて、箇々にさとし、衆に訓へ、彼等が其寄宿舍内の生涯に、多分の興味と愉快とを供へ、彼等の父母となり、兄弟となり、同情と熱誠とを以て之を訓導するに於ては、彼等學生の爲めの利益となると頗る大なるべく、また一學校の校長たるよりも、一寄宿舍の塾長となりたる教育家が、育英の事業の酬ゆる處頗る多からんなり。且や學校を設立するとゝなれば、學生等各其志を異にはすべけれど、先々同途の修業をなすものゝみを薰陶するものなれども、今いふ如き寄宿舍にて見れば、各種の學校に入りて、夫れ〱別途の修業をなすものを集めて、等しく彼等の胸底に鼓吹したる自家の精神主義の再び彼等を通じて煥發する處、種々の方面に現はるゝありて其愉快甚だ尠からじ。學校の教育が追々と形式に流れ、學問的に偏して、精神の教育の行屆き兼るはよく〱、考ふれば講堂の教育の自然の結果にして、その

行届かざる處を補ふには、此種の寄宿舍教育尤も其宜しきを得たるものならん。凡そ學校の寄宿舍といへるものは、精神的教育を施す最良の場處なるに、今日にては其便利を見のがしにするの風あるは甚だ不可なり。各學校ともに其寄宿舍にては、學生の德性薰化の任に堪ふべき良教育家を塾長となすの必要あり、塾長の撰擇に勞すると、學校長を撰擇するの勞にも等しかるべし。學校々々の事もさることながら、前にいへる如き寄宿舍を設けて、自ら身を其中に投じて、其主義抱負を發し、素養智德を行ふの至誠なる教育家あらんとは、實に今日教育界の爲めに、尤も希望すべきの事なりとす。其設立は既に今日にも、必要なるとなり。然るに學校に據りて育英の事業に任ぜんとするの教育家はありと雖も、未だ寄宿舍を設け、之に據りて盛に子女を教育せんとするの教育者あるを聞かず。されど眞に志あり德あるの人にして、寄宿舍教育に熱中せば、講堂の教育の克し難き處を克くし、師道の教育も古の美觀を其儘に行はしめ得べきものを、滔々たる天下の識者此に注意するもの尠き抑もまた何が故ぞや。

○教育家の魔力

ラフハエルが紙面に臨み、アンゼロが石材に對し、其筆を揮ひ、其刀を動さんとするに當りてや、其精神は正にこれ上帝が天地人を創造し給ひたる其精神と異なることなし。この靈妙神異の精神これぞまた教育家の有せざるべからざる大精神なりとす。かのフエチロンが驕傲不遜にして、滿宮の恐怖たりしルイ第十五世の王子を感化して、變して滿宮の希望たらしめたる、或はまたペスタロチーがクレンザーの貧民學校に於て、集り來る昨日の貧兒を化して、今日の良兒たらしめたる、其等の魔力の源泉は、即ち彼靈妙神異の精神に在るなり。美術家が靈能の技術は、己と共に生き、己と共に亡し、之を人に傳ふべからず、たゞ其作品中に髣髴す。教育家が教育上の魔力もまた然り。然るに後代の教育家は、自らこの魔力の源泉を貯へずして、徒らに偉大なる教育家の事業の外形を望んで、之を形式に寓す。其功のあからざる素より當然の數なり。

○國體てふ文字

單に國體といへど、これに兩樣の意義あり、一には即ち國家の精神又は國粹（ナチオナリタート）といひ、二には即ち國家の組織（スターツ、フオルム?）を意味す。國粹即ち國家の精神は、元と定形なし、人智の發達、德義の進歩につれて、進歩發達せざるべからざるものなり。然るに國家の組織といへば、即ち共和、帝政、立憲などいふ定形の組織なり、皇統連綿といふもこれ一箇の定まりたる組織なり。然るに今の國體論に惑溺するの人士は、多く此兩義ありて曖昧なる文字の區別に迷へり。試みに彼等の論文一章を讀み來れ、時としては第一義をいひ、また時としては第二義をいひ、兩義混淆、遂に論旨の何たるを知るべからず。而してこの不思議不明瞭の議論は常に世を惑はし、特に教育界を害す。百義立ち、萬智明らかなる日進の當世にも似合はしからぬことといふべし。

○小學教員の俸給平均額

文部省第二十二年報によるに、小學教員の俸給は一ヶ月五十圓以上なる正教員、神奈川、長野の二縣に在るのみ。和歌山、鳥取の二縣に於ては、正教員の月俸三

圓乃至三圓五十錢、また准教員の月俸の一圓、一圓五十錢或は二圓を出でざるは決して珍らしきことに非ず。然るに女子の正教員にして五圓以下の月俸を受くるものなきこと、注意すべきの一現象なり。しかし女子の正教員を傭ひ居る位の學校は經濟向きよろしき處なるべくして、さる學校にては、男子の正教員には女子よりも餘計の月俸を拂ひ居るべきなり。兎に角に三圓四圓の月俸の爲めに、育英の大任を負ひて、職責の重きことを世の中より八釜敷いはるゝ小學先生の身もまた哀れむべきものなるかな。

○教育界の内幕

教育界は宗教界を次ぎて、内清淨潔白、垢穢を容るべからざるものたり。然るに宗教界を見ればまさに白く塗りたる墓の如くにして、内は腐れこ穢れとに滿てり曩に僧侶社會の腐敗を叫ぶ聲のやゝ聞え渡りたるが如きものは、これ僅に識者の眼に瞬き見えし影の一點のみ。其腐敗あれしきの事に留るとせば、宗教界はまだ割合に潔白なるものなり。偖て教育界に至りては、人其清淨潔白なるべきを責むること、宗教界に對するが如くにてなければ、其内部の腐敗の如き一度び之を暴露し來らば、誰か其鼻を掩ふて遁逃せざらんや。『世界の日本』の投書家某が東京教育界の腐敗を慨して、種々の忌むべく嫌ふべき醜陋の事實を擧げつゝ、かくて

若し夫れ教師にして放蕩流連、翌日睡眼を開きて教鞭を採る者を上ぐれば、殆ど數ふるに遑あらざらんとす。爲政者曰く、此の如きものを訊さんとすれば、殆ど府下の小學校は皆閉校せざるを得ずと。

これたゞに東京府下の教育界のみ然るものならばまだしも、如斯きが全國教育界の内狀なりと思へば、痛恨何ぞ禁ふべけんや。死人を取扱ふとをのみ役目と心得たる僧侶の腐敗はなほ恕すべし。未來の國家を組織すべき子弟を教育するの重任ある、教員にして、其腐敗の狀態甚たしきものあるに至りては、遂に宥すべからざるなり。誰かこの濁流に向つて一握の鹽を投ぜんものぞ。誰か一條の鞭を擧げてこの醜奴を聖き境地より追ひ出さんものぞ。

○小兒の玩具

時事新報記者の取調べたる處によるに、其重なるもの殆ど八十餘種あり、内

○舊來の玩具にては

犬張子　獅子頭に横笛　天神　赤馬
デン〳〵太鼓　刀　鎗　長刀
弓矢　竹馬　春駒　貝笛
鳩車　張子の面　市松人形　飛んだり跳たり
張子の虎　はじき猿　鰹節に猫と鼠　玻璃製ポカン〳〵
紙製文福茶釜　風車　板かへし　竹蜻蛉
弓鐧　舌出三番叟　起上り人形　水からくり
竹製水鐵砲　米搗車　放し龜に鋼　一文人形
岩雀　竹獨樂　木獨樂　跳兎
籠雀　猿餅搗　蝶々とまれ　俵ころがし
桐鼠　竹筒眼鏡　すた〳〵坊主　水鳥
磁石の魚釣　糸製手鞠　羽子板に羽子　外數種

○當今の玩具

金屬製自動滊車　同滊船　同鐸打自轉車　同鐵道馬車
同人力車　同數疋立競馬　同滊車の隧道廻り　同曲馬
器械の鼠　器械の龜の甲　水泳魚　棒押の蝶
籠入笛附の雲雀　吹鳥　軍用喇叭　風琴獨樂
疊込新舘パノラマ　響れの吹上　小寶鈴　假名の繪合せ
九九の繪合せ　護謨鞠　綿細工動物　紙細工動物類
竹細工　硝子箱入龜の甲　幻燈具　硝子細工
積木　並べ板　角木繪合せ　輪並べ
操木細工

くみてこそ心すむらめ賤の女が
いたゞく水にやどる月影
西行法師

雜録

左の小說はこれ往年本誌の爲に『こぼれ指環』を作して、文名當時に嘖々たりし、某閨秀文士の新作に成れるものにして、自今號を追ひ、之を載せて更に江湖の愛讀を俟つ。

編者識

野路の菊（小說）

紫琴女

其一

名にしあふ難波の街の金滿家、軒を並ぶる今橋筋にも是は一際眼に立ちて、磨き立てたる格子造り美々しき一構へ、音に名高き鴻の池とは、此お家の事であらうかと、道行く田舍人の眼を欹てぬもなしとかや。標札に金滿家てふ銘こそ打てなけれ、今樣風に其肩書を並べなば、何々會社々長何銀行頭取何會社取締役と、三四行には書き切れ間敷流行紳商、名さへも金に緣ある淵瀨金三とて、頭の藥罐と共に、知らぬ人なき五十男、年を問ふより世を問へとは、實に此人の上をいへるにやあらむ。山高帽子いかめしく、黑七子の羽織着流して、ゆつたりと蠟塗の車に乘りたる姿は誰が眼にも、帽子を脱げば、かみな月冬枯時もはや近く夕陽照りそふ兀頭、其後頭には置く霜の、白髮あるべき年輩とも、心付くもの稀なりとか。妻は其名をお秋といひて、金三よりは年二つ劣れりとは、戶籍の面に明らかなるものながら、ふけ性にて老人じみ、五ツも六ツも姉樣の、出戻りなどしたるがかゝり居るにやと、誰誤まらぬものなきも道理、金三には別に、お艶といへる妾ありて家事万端とり賄ふなれば、新參の奉公人の、いつもお艶を奥樣と思ひ、お秋を御隱居樣と呼ぶも、强ちに咎むべき事ならねど、奥樣と見誤らるゝお艶の嬉しさに引替へ、御隱居樣と呼ばるゝお秋の心根、推量らぬものぞなき。されど、愼み深きお秋の、ついぞ角目立ちたる事はなけれど、口善惡なき下女下男は、とり〳〵に噂してお艶にくしといはぬはなけれど、人の事より我身の上大事がるが世の習ひなれば羽振よきお妾さんに逆らふて、其身の損を招くでもないと、表向はお艶に媚び諂へど、女部屋でのひそめきは、いつもお艶の是非沙汰なり。古參より新參に、新參より又夫へ〳〵と、いひ傳へ聞傳へて今は誰知らぬものなきお艶の素生、彼は藝名を小艶といひて、素は南地に左褄とりしものなりとか。藝より

は容貌で賣れ容貌よりは男たらしの上手にていつも劵番に千壽の花の咲せしものなりしに、年頃物堅かりし金三の、四十二の厄年に祟られてや、七八年前より不圖お艶に迷ひ出し、女は是をとゞめをさゝれて、家を外なる駄々落遊びを、温和しきお秋は氣にして、夫程御意に入しものなれば、お落着せ遊ばした方がと、家の爲め夫の爲に勸めし詞を渡りに舟と、年にも恥ぢず受け込みて、島の内あたりに妾宅構へさせ、夫にてやつと尻落着たるものゝ、落付かぬは妾のお艶にて、彼は其前より俳優の丸三郎といへる情夫があり。夫へ金のつぎ込たさに、お客どりとの評判取りしほどの事、爭で心から金三に身を任すべき。落籍されての後も、危き首尾に丸三郎との逢瀬絶ざりしが、金三の顏次第に廣く、身の忙しくなるにつけ、妾宅通ひも心に任せねば、本宅へとの命默し難く、引取れては來しものゝ、あれの是のと苦情を付けて、奥樣との同居心苦しければ、年に一二度は氣保養の爲め、湯治にも遣て戴きたし、次には又奥樣より世間並の召使ひ待遇是も前以てお斷申上たしなど、有らむ限りの我儘述べ立たるは、本宅へ這入じとの工みなりしに、お艶にぞつこんはまり込たる金三

のかゝる事聞ても打腹立たず。可愛き子供にあまへられてゞも居るかのやうに、あれもよし、是もよしと點頭きて、流石商業界の利者とも云るゝ身が、みんごとお艶に降伏したるは、遼東還附の一條よりも猶且いひ甲斐なき事なりしとの此條は年久しく仕ふる藤助といふ老僕が、まばらなる齒を喰しばりての述懷たり。赤ら顏のお三が其後を繼きで、其所でサアお氣の毒なはお心よしの奥樣、旦那樣より仰せ渡しでもあつたものか、妾風情のお艶に御遠慮なされて、一切旦那樣のお傍へはお寄りなされず。旦那の御用は何も角もお艶でなければ埓明かぬと、覺悟をお定めなされてか、一にも二にもお艶との〳〵とお頼みなされ、御自分は御隱居氣取の引込思案是程齒痒き事はなし。若し是が我身ならばお艶を出すか、自分が出るか、二ッ一ッのはなしをつけても、奥樣には金之介樣といふお子もある中、なんの〳〵御親類方がだまつて見て居らるゝ事でなし。とはいへ奥樣いとしといふ素振假りにも色に顯はれては、一日片晌此所の家に置かるゝ事でなし。今日迄に是れでしくじつたが幾人と指折りかくるに、痩ぎすなお針女は之れを抑さへて、こんなことは、奉公人の我等の構まふた

事ではなけれど、腹立しきはお艶めが、奉公人の咽喉を〆め
て、旦那に我世帶持ち能き手柄見せむとて、奥様の萬事鷹揚
なりしに引替へ、朝は天井の映るやうなお粥に、香のものは
三年越の古たくわんばかり、新漬ものはお醤油が入るといふ
て喰させず。成程是位にしたならば、是々の雑用が減り升た
と、旦那への手柄顔は出來やう、夫れが又ぞつこん旦那の氣
に入りて、三味線の外持ちたる事なき身の、釜の下まで氣を
付くる心遣ひ、嬉しいぞや過分なぞやと、サ其所迄は聞かね
ど、何でも其所等の事であつたと見え、お艶の受けはよくなる
ばかり、是で末迄通せるものならば、悪い事はせぬが損と、
思はず是も力み返るに、藤介くはへ烟管をポンと叩き、夫れ
がサア若旦那も今年はもう十八お艶のさしがねに出た事とは
御存知なく、嬉しさうに東京へ、修業に御出なされたは、は
や三年越來年あたりは高等學校とやらへ、御入學も出來ると
やら、其上で大學でも御卒業なされて見や、夫れこそ大した
お人にならるゝなり。其時こそは奥様も占たもの、いくらお
艶が威張らふとても、若旦那の代になれば譯もなく閉口しや
う、其所でこちと等も其時は甘いものも喰べさせて戴き、永
年辛棒の御褒美に有付くといふ者よといふを言さずお針女は
進み出で、お前さんは未だ眼が底い、其所等にぬかりのある
お艶ではなし。一人息子の金之介様動きなきお跡取りとは、
お艶もチヤンと知つてかゝり、己が身寄りのお静さんを、養
ひ女として育てゝ居るは、何の爲めぞと思はるゝや、旦那様
は御老人、其の亡き後はお静さんを、若旦那のお嫁にして、
親顔せうとの深い工み、夫れなればこそまだ十三の小娘のお
静さんを、若旦那の夏休みにお歸りなされし時は、一倍も二
倍もつくりたて、お茶のお給仕煙草の火、小間使にでもさす
べき用を、若旦那の事といへば何でもお静さんにいひ付け、
今日は堺の大濱、明日は大川の涼みと、下へも置かす若旦那
の御機嫌とるは、我等の咽喉〆むるお艶の所作とも覺えず。
夫も是も我が身の行末を案ずるからの事とは、此私の黒い眼
で睨で置た。お艶の曲事はまだ是のみでなし、年に二度の湯
治行き、あれをお前さん達は、並の湯治とお思ひかへこ、得
意顔に説出せば、藤介ホク／＼點首きて、夫れやアなんぼ老人
の己れだつても勘付かぬ事はなし、病人とも見えぬ身躰の保
養三昧旦那のお種宿したき願ひと、口癖のやうにいふては居

れど、忙しき旦那の一所に行かれぬを幸に須磨の海水、有馬の温泉と、毎年極つて行くのなれど、藥は水でも湯でもなく白い首ののつぺり男とは、妾宅傳來のお鈴の蔭口、あれも大方近頃手當でも薄らいだのであらふ。此事だけは、一言旦那に申上たけれど、奥樣でさへ口をつぐまるゝに、下部風情の、我等が出しや張る幕でないと、こらへては居るもの、此間も此間とて奥樣の、お艶の留守を氣にせられお艶殿が早う歸つて呉れずでは、旦那樣のお世話は不行届勝でお氣の毒やと、お艶の居ぬ間は一層旦那に氣を兼ねらるゝ樣子、丸で初心の嫁御寮が、姑の前へ出るやうなと、己れは見てさへ涙が溢れると老人の一徹に、思はず水洟打かめば、お針とお三は一時に吹出し、藤介どのゝ何事ぞ、當節柄そんな忠義三昧は流行らぬ〳〵　夫よりは鬼の來ぬ間の、洗濯時とは今日此頃の事、お艶どのも、大方須磨で今頃はお樂しみであろ。我等は似合のお芋の御馳走、出し合ひで買ふじやないかと、お針の發議は立どころに成立ちて、藤介爺は使命を帶び、風呂敷片手に立出たるが、やがて燒芋の砲煙彈雨に、お艶の噂も中止となりしなるべし。

月下聽蟲

紫苑の山人

此の夏逗子の里にまかりて、或る夜、獨り月にうかれつ、小松しげれる磯邊を嘯きさまよひしに、むしの聲いと妙に、身は仙境にあそびし心ちせられて乃ち天に登りしか、地に在りしか、我さへ之れを知らざりき。浮びいでしまゝをかくなん、後にしるしぬ。

打ち寄する　沖つ白なみ
磯をあらひて　鼕々又鼕々、
波の絶え間に　ふり出てゝ
鳴くや鈴むし　チンチロリン
チンチロリン

吹きわたる　磯の松風
草を拂ひて　颯々又颯々、
露に聲あり　ふり出てゝ
鳴くや鈴むし　チンチロリン
チンチロリン

さえわたる　大ぞらの月
滿地をてらして　皎々又皎々、

天地聲あり　ふり出でゝ
鳴くや鈴むし　チンチロリン
チンチロリン

人を拜崇する時の心得

青柳有美

我はカーライルを繰り返へすまじ。されどたゞ言はん、時所位によりて僅にその神聖と威嚴とを保ち、空名徒に天下に鳴りて才德之に適はざるものこれ偶像なり、これにひれふし、之に跪く、是れバアル崇拜なりと。されど、活人は活人なり、大人は神の權化なり、之を推尊拜崇すること何ぞ必ずしも偶像崇拜の流れとして却くべきものならんや。何ぞ必ずしも舊文明の遺俗陋習とのみいふべけむ。

夫れ天を拜し人を崇むるは、人間の美德人類の特權なり。この一念よくうちに動けば、格物格知の精神となり、人を燃やし人を驅る。もし發して外に現はるれば、乃ち謙讓人を待ち、温乎友に接する美性となり、萬朶の櫻なほ芳を儔にする能はず。もしそれ人あり、未だ宇宙の森羅天地の萬象を拜崇する能はずして、我れよく其美を歌ひ其妙を詠じ不變共通局通奇變の法則をその間に見、眞美の堂に至るを得べしと言はゞ、其言や僞なり。大人の德と美と力とは、之を推尊拜崇する人に臨んで始て顯はる。これ猶ほ磁力の、鐵氣に感應して始て、見らるべきが如けむ。されば、我れ先づ人を拜崇するの心をうちに漲らして、のち其の靈德を仰ぎ、其言に學び、其の行に鑑るを得べきなり。苟も斯の心なくして人を見る、人は是れ六塵の結塊六根の宿りに外ならざらむ。かくして、いぎたなき我を、益々高きものに思ひ、徒に人を蔑り輕しみ、百年を經るも、なほ呉下の阿蒙たること慨はしきの極みなり。されど、天が下の萬の事には期あり、笑ふに時あり石を擲つに亦時あらば、人を拜崇する、豈に道なからんや。人もし心に何の備ふる處なく、何の搆ふる所これなくして、徒に拜崇に耽けらは、思はざるの災、其想を衝き、身を以て却て失望落魄の淵に沈め大人を咀ふに至ることとこれあらむ。

人は人なり神に非ず

こは、エメリヤが劇曲『オセロ』のうちにいふ所なれど、世の

人多くはこの心なきぞ、無上の恨事なれ。かの昨日の大人、往々にして、今日匹夫よりも賤しとせられ、今日は之を揚げて天の高きに至らしめしものを、明日墮して陰府の底にまで下らしむる如き、數々かの人物拜崇の僻蠻にある所以、又その始め此の心なかりしが故のみ、豈に他あるものならんや。この種の人々概ね皆な以爲らく、我が意中のヒーローは、天下比なきのヒーローにして、一點一畫の垢なく汚れなく、オリムパスに其宮居を据ゑさせ給ふジョーブの命も、かくは難有きものに非ざるらむと。暫くにして、一二の弱質欠點偶々發れて眼に映ずれば、驚嘆の餘忽ち其明を盲にせられ、狂ひ罵りて曰ふ、彼は僞善者なり謀士なりと。何ぞ立ち騷ぐことの激くして、事新らしげなることよ。『何ぞ人を以てよしといひしや、善きものは一、即ち神なり』と知らずや。始より大人も亦人なりと達觀す、何ぞその罪に走るを見るも、俄に驚き立つを要せん。彼また人間――血肉の結塊、さあるべきなり〳〵と、悠々憤らず、昔日の拜崇を續持するを得べけむ。

洛東智恩院の伽藍は、世に無缺の建築なりと稱す、されど、欠けたるなきは欠けたるなりと、名匠左甚五郎、傘を取りて其屋根間に挿む所ありしと傳ふ。もし、己が敬ひ崇むるの人、思はざる過ちに落入り、その德なほ欠くる所あらんとも、是れまた『智恩院の傘』なるらむと、識得する所なかるべからず、如來の寶像に、少しは禿げたる處のありとも、其難有味は、髮の毛一筋ほども減ずるものにはあらず、却つて仰欽歸信の念を一倍せしむるのみならず耶。神の獨生子ならぬ人の子は、罪を犯し全からざる處のあればこそ、げに可愛ゆきものなるらし。罪なきと稱する小兒の、世に悅び愛でらるゝことの多きは、その罪多くして、何の辨ふる所もなく、失策の夥く、過ちを重ぬることの數許多なるの所以なるを思へば、三田の福翁が不行届は愛嬌なりと言はれしことぞ、げに眞なるを觀ずなる。

相州江の島なる中津ノ宮の天井に、名工の畫きしものにやあるらん、八方睨みの龜といふあり。讀んで字の如く、龜はよく八方を睨まへ、如何なる人の何處に立て之を覦くも、不思議や、其の眸は常にむきて我を射る。之れを思ふに、凡て大なる人は、皆なこの龜の如きものなるべけむ。其德を仰ぎその

敎を蒙らんとして、膝下に集ふ門弟同人二三百、各皆以爲らく、先生獨り我がために計り、ひとり我れを思ふ、我れ最もよく先生に知られ、其恩遇信任を辱うするものと。然れども、玆に先生のなす處、なほ他に愛するものあるを示し、事實は往々にして、先生の胸中常に我を顧み給ふにはあらで、殆と我を知らざる如きものあるを見、疑心暗鬼を生じ嫉み、怨み、憤り、その薄情を訴る徒あるなり。暫く思へ、人間思想の面積は、限あるものなることを。また思へ、二箇の物躰は同時に同一の空間を占有すること能はざる、これ物理學の公則なるを。さらば、鬼神に非るよりは、如何でかよく百にあまる門下同人の身事を考へ、一々思ひ思ふて絶ゆる間なきに至らしむるを得べけむ。さらば之をなし能はざる何の咎ぞ。たゞ、其御心、時に我を離し給ふことあるを見、その自然の理りなるを達觀する能はず、徒に、昔日の推尊拜崇の虔思を絶ち、之を呪ふて冷淡なりと譏る、誠に至愚の極みなるらんかし。

又、大人は、一人のえて私すべき

私有物にあらず

大人は天下の大人なり、同人門下一同の大人なり。されば其人の愛顧と謀慮とを、己れ一人に注がしめんとす、それ難哉。そのたゞ我と彼と相對せるの時、彼れ滿腔の同情を傾け注ぎて我を愍へ慈み給ひ、我が影の其念頭にうつりたる時、先生深く慮りて我がために計ひ給はゞ、それが拜崇者たるもの、よろしく見て隨喜落涙滿足する處なかるべからず。また人々に愛慕敬悦せらるゝ、

大人君子は情人多き戀人の如きものなり

されば、其人や、たゞ僅に一人を門下に控へ、他に仰喜する輩なき小人鼠輩の如く、その全心を獻けて一人者のために盡すこと能はざる、素よりなるらむ。人は曰ふ、愛情は數に非ず、無量なりと。されど、是れ誤れり、愛情は實に數たるなり。されはこの限ある泉より汲み出して、多數の人々にふりまかんとす、必ずや一人者の感得する所に於て、薄きものあり、所謂物足らぬ感慨の胸を衝くある、又止むべからず。之をしも、輕薄といふ誤れり、薄情といふ誤れり。况や之がために恨み、之がために憤るが如きに於てをや。この種の大人、多の人々共有の身を以て、徒に一人者のために犧牲とな

り、一人者を熱愛して遂に己を殺すに至る能はざること、實に理の當然なり。一人者の涙を救はんとして、殘る九十九を迷はし、牧ふもののなき羊のごとからしむる、これ道に非ず。これを求むべき、他にあり、妻なり夫なり子なり親なり刎頸の友なり情人なり戀人なり。されば、先生の懇願の、我がために身も靈もさゝげて、いとし〳〵と戀しくるゝ情婦の熱愛の如く、深く強きものならで、何となくパッとしたる所あり、隔履の思あること、又是非なき次第なるらん。されど、人をして此る思に沈ましむるほどのものならねば、未だ以て大人君子と言ふべからずと我は思ふ。

人を拜崇する時の心得一篇、書しえたる處如件。

破窓偶語

長汀生

人

人は天使にも非らざれば、又悪魔にもあらず、人は同じく人にして、而して天使と悪魔との兩性を兼ね有す。されば之を待つに天使を以てすべからず、また責むるに悪魔を以てすべからず。此に曉り至らざるが故に、世には杓子定規的の道徳論擡ぎ出さるゝなり。

人の天使及び悪魔の兩兼有性に就いて考ふるに、悪魔の性は即ち之を退けんとする處、天使の性は即ち之より達せんとする處、然るに下るは易く、上るは難し、悪はなし易く、善は遂げがたきものなればにや、人は悪魔に就きて知る處多く、天使に就きて曉れる處尠し。かの美術家たり、文士たるものが、悪漢を刻し、悪事を記する上へには、巧妙達せざるなく、深刻到らざるなきものはあり。然れども善人を刻し、善事を記するが上には、刀筆の目ざましきもの極めて稀なり。蓋し如斯きは神又は天使の影の捕促すべからず、至人善者の平凡にして特異擧げていふべきなく、また之を見ると少きに反して、悪人悪事の異彩特色の甚だ認め易く、且つ之を知ると多きが爲めなるべしと雖も、亦これ人間思想の悪に馳せ易く、善に趨き難きの故に由るものなくんばあらず。

伊太利の俊傑ジョセフ、マッニー『人』を論ずるの警語あり、曰く

史乘を繙いて之を見よ、迷敎の人あり、封建の人あり、十七世紀の人あり、北方の人あり、南方の人あるを見ん。然れども彼等はみなたゞに彼等が生息したる國家或は時代の智識進歩の其度に應じて、之を代表し、また其特異の道德界及び物質界の生産物たるに過ぎずして、彼等を超越せると遙に高く凡ての時代と凡ての國土の人は立てり。即ち無疆の進歩の爲めに創造されたる、天然の長子、神の像なる人、其滅びざる品質よりして見れば、彼は正に神の有てる道義の力に充ちて、宇宙の中心たる人、以太利人にも非ず、英吉利人にも非ず、果たまた佛蘭西人にも非ずして、宏大無邊なる世界の市民、永遠不變なる万有の法則の模型なる人、即ち『人』なるものあり。

と。偉人豈に一國一世に跼蹐して、其境を越えざるものならんや。彼は洵に万世の人なり、天下の人なり。彼の偉業は宇内を蔽ひ、彼が德行は古今を化す。吾人苟も偉人の跡に私淑せんとせば宜しく天下の人を求むべし。一國一世に齷齪たるの小人物、豈に師表をなすに足らんや。

おなじマッツィニーいへらく『人民は神の豫言者なり』と。豫言者なるかな。神は計り、天使は傳へ、人は豫言し、惡魔は之を破らんとす。人は天使と惡魔との中間に立つ、其使命爰に在り。之を知らずして可ならんや。

斃而已むべけんや

凡そ一業に志すものは、必ず斃而已矣の意氣を抱き、或はまたかく揚言するものあり。斃而已矣の語はそも誰がいひはじめけん。こは業の成否を現世に限りて、深く死後の未來に知る處なきものに非ずや。苟も天命を曉り、未來を知れるものゝ事業は、豈に身の斃るゝによりて、已むことを期すべけんや。之を偉人の事業に鑑みずや、假令彼の在世は千百載の昔に在りと雖も、其時始めし彼が事業は、今なほ生きて活動し、且又日新の進歩をなしつゝあるに非ずや。彼が身軀は塵土に歸して既に久く、情なき馬蹄の日に幾千度か之を蹴らん。されど彼が生命は、其遺業の中に生きて存せり。彼の事業は身斃れて決して已むものに非ず。予は靈魂不滅の玄義を解するなほ淺し、然れども人の生命は、其事業に結びて、永遠不滅なるべきものたるを信ず。人の身のこの世に永らふる時の

間の事業は、僅に種子を地に蒔くほどの事に異ならず。身假令ひ斃るゝも、曾て蒔きたる種子は、生え出で、榮え、世に茂らん。彼の生命は此時に當りて、猶活潑々の生存をなして、其事業を行へり。人よろしく如斯きを期して、初めて業に志すべし。冀くは彼れ斃而不已矣の意氣あれかし。

○若松殿子の君を思ひて　　鹽見愛郁子（投）

詩美の神やまれきけん
　ゑたふ吾等をふりすてゝ
出立ちませし其日より
　花さきにほふ武蔵野の
文の林に若松の
　みどりの影は消えうせて
あはれ淋しき暮秋の
　木枯渡る心地こそすれ。

○洪　水　　猛迂生

あれ見よ〳〵山なす水を
　血しほさ焔のあの洪水を
煙はのぼり人馬は斃る
　あゝ！情なの我が神様よ
されど怖るなよ
大厄一番絶後蘇生これ古のバビロンに非ず。

隨感

○落て驢前馬後にあり

先づ神の國と其の義しきとを求むべし、宜べなる哉、働らく者の其の糧を獲ることや。祿は其中にあるとを信じて必らずしも先づ之を求むるにあらず。士たる者當面第一の感激は即はち道を行ふにあるとを覺悟するの決心ぞ、言ふには易げにして自得するは六かしきものなれ。生命を得んと欲するものは之を失ひ、之を失なはんとするものは反つて得。身を棄つるの安心ありて後ち浮む瀬あり、死地に進んで初めて生くべし。人間性靈の進歩退歩は、かかつて物質に委頼するか否かの一事にある哉。彼の晩生の爲に備へ、子孫の爲に計るに及んで、心の萎微して振はざるに至らざるものは稀なり。天下、餓て死するものは、食つて死するものゝ多きに及かず。丈夫、三合の糧、之を一日に得るに何の難きことかあらんや。所謂る貧しきとは、其の多慾なるが故に貧しきのみ。若し安んじ

て其の職に勉め、超然として其位を守らば、人壽七十、窮乏の故に死するものはあらざるべし。食に生きて靈に死し、肉に富みて心に貧しきを感ずるは、何等の愍れぞ。もし箇の靈々照々たるものを認むれば、落ちて驢前馬後にあるを知らず乎。

○中夜孤影を見て寂しからず

人死して神となるとは、吾國の古人そも誰よりや言ひ初めけん。三寸の息絶えて靈氣、天に上り、肉骸快く分散して、彷彿として常に存するの者を存す。念じて之に交はれば、在らざる所なく、來らざる時なし、叫ばず、言はずして濃に之と物語れば、情緒。魂を纏うて樂し。時に彼蒼に對つては、月の微笑む心地し、時に孤鳥を送つては、音信の便りを感ず。吾行く所に彼あり、吾爲す所を彼は見るべし。特更に不言の樂しみを破つて喃々として語らざるも可し、悉皆の眞實すべて其の知りつくす所ならんが故なり。中夜、孤影を見て寂しからず、夙朝ひとり起きて快然として笑ふ。姿の不斷、吾に伴ふとあれば也。

○吾心中の花

春に花多し、多き花の中に取わけて一つの花を愛づる可か。秋に花薄し、薄き花を惜しみて其の悉皆を愛でんとする可か。冬に花なし、花なきが故に之を慕ひて、念じて之を思ふ可か。夏に花の果あり、之を愛でて花を忘れんか。もしくは之を功とせんか。そも〳〵何れか可なりと問ひ設けて、獨り莞爾として笑ふ。吾心中の花、それ何人か能くかいまみたるものありやと。

○惡魔嘲つて曰く

去れよ！ 惡魔、叱して遠ざくれども執拗くも附きまとふ哉、吾が利劔を揮つて寸斷々々すれども未だ死せず、盤石を載し掛れども尚ほ動く。去れよ！ 惡魔、此は汝の住家にあらず。去つて、利慾の子に入れ、鄙吝の人に入れ、獰惡の人に入れ、余は汝の住家にあらず。惡魔、嘲けつて曰く、天下何處にか吾が住家あらざる、清白の君子は皮膚のみ、其血と肉とは吾を養ふに恰好のものなり。英雄何ものぞ、傑士何ものぞ、其

の惑ふに方つては一様の凡夫にあらずや。汝黄口の書生、吾を追はんとするに先だつて先づ吾が住ふことを得ざる家を築け吾が住家は多し、吾豈に特更に之を求めんや。

○處　女

純潔の處女、風波の暴きを知らず、土泥の穢らはしきを思はず、人の執迷を覺らず、蛇の如く窺ふを察せず、之を溝壑に導くものを疑はず、靈生の破らるゝを恐れず、淡然として前み來る。嗚呼、如何なる強惡の輩か能く其の純清を害なはんとするぞ。曰く『聖』を瀆すものは救はれがたし。

○言行は不一致なるべし

人の文章を讀んで何如にか感ずる。もし其の高尚の理窟を言ふが故に感服するか。祝福は汝にあれども亦溺るべからず。誰か一日三回の飯の食ひかたを論議記載するものあらんや。珍らしげに書記するは即はち理想にして其未だ行はざるの故のみ。自得者は默し、實行者は論ぜず。理窟あるは即ち未だ行はれざるの證兆とこそ思ふべけれ。

○『母と子』の歌

島崎藤村、飄逸なる詩人の子の爲に歌ふ、『世界の日本』が掲載せる「母と子」の吟、何んぞ夫れ沈痛なるや。子の曰く、

　見れどもあかぬ書なれど　讀みたまふべきものならず

母の促がすに、亦曰く、

　調べも淺きわが歌は　解したまふべきものならず

母の亦更に促がすに、子の又曰く、

　濁りて清める吾が酒は　醉ひたまふべきものならず」

人をして飲泣悶絶せしむ。衆生、詩人を生む、汝は夫れ詩人の母ならずや。而して能く其歌ふを聞く乎。詩人幾たひか辭して歌はず、而も遂には歌はさるを得ず。

　優しの今のくりごとや　筆にうらみは寫せども
　　母にうらみはよもあらじ
　雲となりまた雨となる　晝の愁ひはたえずとも
　星の光をかぞへ見よ　樂みの數夜はつきじ

嗚呼、清秀、幽遠の調、われは近時久しく此の種の琴の音を聞かざりき。

時文

○日本大辭典

大和田建樹編　　博文館版

日本大辭典は、國學者大和田建樹氏が、苦心多年の日子を費したる編述といふ。編述の体裁、『言海』『詞の林』『日本大辭書』などゝ異なりて、『いろは』順を以てし、また字音の相似たるをば、一處に集めたり。例へば『ちやう』『ちよう』『てう』『てふ』と音を異にするものをも皆な音の耳に近きによりて『ち』の部に入れたる如き、字音に通ぜるものには煩はしく感ずれども、初學者の爲めには、甚だ便利なり。また發音を附したるも、此書の特色なり。言語は雅に失せず俗に失せず、且つ德川時代の言語を收め、說明は至りて簡潔明瞭なると、評者親しく『詞の林』『日本大辭書』の二者に比較して感じたる處なり、文字も亦兩者より多きが如く、言語のみにて解し難き處には挿繪を加へたるなど、和學に志す者の爲めには、甚だ便利なる辭典といふべし。定價の如きも極めて廉に、元來三圓の處、十月中に申込むものは、一圓六十五錢、十一月中ならば一圓八十錢にて購求せらるべしとの事なり。學者宜しく一本を坐右に備へて可なり。

○はいかい名家選

尾崎紅葉編　　春陽堂版

選中には杉風句集、丈草句集、惟然句集、鬼貫句集の四珍書あり。もとこれ紅葉山人の此等の書を獲るに從ひて、手寫し置きたるものを一書の中に蒐集したるまでに過ぎず。しかしおの／＼これ名家の句集、斯道の人を益すること多からん、其道の人ならずとも、四子の面目に接して、彼等の高懷に接するを得てうれし。しかし初心者の慾目には、博識の紅葉が、これに何程かの註釋でもつけ置かれたらば、よからんにと思ふぞかし。

○實用看護法

フレザー孃著　成瀨四壽女譯　　警醒社出版

此書は、曩に京都看病婦學校の教師たりし、米國人フレザー女史が、看護法教授用に供せしものをば、今般歸國に際し、在國の紀念として、編纂し、同校教授成瀨四壽娘之を翻譯したるものなり。著者の志は、只看病婦のみならず、母たり、妻たる人の看病心得の一助ともならんを欲するに在りて、簡明丁寧に、實用的に記述されあるやう見受けらるれば、其素志必らずや空しからじ。母妻諸氏其の坐右に之を供へて、平素之に學ぶ處あらば、大に益を受けんか。

○たかねの雪

落合直文著　　明治書院版

これ野中至氏夫妻が、學術的冒險の事實を、落合氏の記述されしものなり。其事柄既に壯烈雄偉、以て世を感嘆せしむるに足るものありて、加ふるに萩の舍氏の妙筆を以てし、字々人をして悲慘壯偉に泣かしむるものあり。卷首附する處の兩君の肖像、今其風丰に接して、更に其壯志を思はしむ。

○文學そのをり／＼

坪内逍遙著　　春陽堂版

坪内逍遙が明治廿四年このかた、書き立てたる論文、說話の新聞、雜誌に見えたるものの中脚本、小說類の翻譯、評註等を除きて、總まとめにまとめたるものは、此『文學そのをり／＼』なり。題目百三十餘程、中には一時の文界を騷がしたる有名の沒理想論もあり、人生四季、評釋天の網島、續小羊漫言、歷史小說論をばじめ各種の批評、論文、小言、紹介、みな讀むべく、以て文士として說論する方面の逍遙を知るに足らん。文章よりいへば、逍遙の筆は、柔艷にして、險なく、奇なく、されば亦氣力薄く、熱意に乏し。これ等其文に於て尤も遺憾とする處なり。

○太陽小說第二編

博文館版

收むる處、小金井喜美子が『浮世のさが』大橋乙羽の『子煩惱』福地櫻痴の『夜の鶴』江見水蔭の『朝顏』依田學海の『阿新』幸堂得知の『心中女』嵯峨の屋おむろが『浮世新聞』柳浪が『狂言娘』渡邊霞亭が『銀釵』南新二が『滑稽道中双六』なり。皆是れ曾て『太陽』に掲載せられしものと雖も、今かく一册に纏められて見ると、曩に一讀せし人も、また讀む氣になり、讀み落ちした人は、これにたよりて讀むべし。作者各其得意の點に於て其筆を用ゐ、皆讀むに足る。中にも寡

美子が麗筆と、柳浪が深刻とは、とりいでゝいふべき第一のものならん。

〇籠まくら　六人合作　春陽堂版

漣山人が『女やもめ』は江南乙彦といふ梅原綱子の幼なじみの御仲好は年長じて色々の境遇の爲めと、また綱子が自らを昔程思はぬらしく考へたとで、世話になつた小磯動作の娘の濱子といふを一生の妻と定めた處が、扨て其綱子は無言不遂の戀に日頃あくがれて、乙彦を思ひ病み、精神病となつて、鎌倉の海濱に病を養つて、漁夫の子を相手に樂しんで居るといふとが知れて、乙彦の驚き一方ならず、後悔臍を噬めども及ばず。由て綱子が未婚の寡婦を期するが如くに、彼は有妻の鰥夫となりて濟からぬ俗務の間に、剛愎非道の社長を戴き入つては快からぬ家庭の中に、驕慢不貞の妻を守らればならぬ不運の寵兒となれるに痛悶するの悲哀譚にて此小説中第一の見所にて、而して山人が尤も骨折つたる主眼の處は、例の坊ちやん、嬢ちやんの可愛い、御仲好の遊びとも逹ち同志の、幼い戀なり。併し此處は妹背貝の二主人公が、また出現して來たかのやうに思はるゝはひが目か。どうしても彼と此と、同じ役者が、些か變つた遊びをして居るとしか見えず。なれど其遊び方、相互の仲の、年にしては、ちと大人びてはいれども、流石は此方面に獨得の妙腕を有する山人丈けに、よくも描かれたり。も少し書いてあればと思ふのは、お濱との中らいの事なり、それがありてこそ、乙彦が鬱悶痛嘆がはしめて引き立つべきなれ。今のまゝにては其邊の處あまりにアッケなし。

柳浪の『信濃屋』例の深刻悲慘の文字、信濃屋の娘お玉、曾て戀ひ慕へる丁子屋の幸二郎に嫁したりしに、姑の殘忍なるが爲めに飽かぬ中を割かれて離別し、幸二郎は之に失意して家を出で、お玉は病めり。然るにお玉の父兄弟皆な死して、必然家督相續すべきものとなり、長太郎といへる我家の懸り人の、病中介抱の親切なるに絆されもし、母の勸めもあるよりして、之を二度の夫としたり。長太郎はこれといふ機能はないが、正直一遍の男、此男七代目の信濃屋の主人となりてより、流石の大家、いつとはなしに寂びれ出だし、遂ひに棟割長屋に今日も暮し兼ぬる生活の身となるに至れり。お玉は常に幸三郎を忘るゝと能はず、また家名を起さんとするに氣はあせれども、長太郎の氣概なき、日々當途もなき金の算段に出ありくのみ。お玉自ら一日金策に出かけたる途中にて、戀ひしさ堪へやらぬ幸二郎に出合ひ、彼より金を貰ひ受けたる處、此事の長太郎に知れんかとの氣遣ひより日頃の境遇と人情と、愛と戀と、外聞と眞心と咬合嚙合、心悶へ苦しむと一層劇しく、遂に死を決して自殺し、長太郎は、一子長吉を負ひて、亡妻を慕ふて家を出で、狂人乞食となる。長吉常に父の背に在りて、父に死を勸むるとこれこの慘話のキャタストロフなり。慘絶悽絶の事は柳浪之を描いて、酸鼻に堪へざらしむ、これ又『河内屋』と共に讀むべきものとす。

小栗風葉作、紅葉補といふ『朧々』、唖の女房にいや／＼なつたお園が、宇治の茶畑の我家に保養に來た、ゆかりある畫工の秋田といふを、慕つたらしく、畫工も之を愛したらしく、別に臨んで秋田が車に縋りて、今より一生物言はぬ者を二生の夫と仕へますと淚を呑むお園、これが、此小說の髓をなす抑も／＼の種なり。唖の愚直の態度を寫さんとするに、隨分骨折も見ゆ、先づは可なりの出來と評すべし。紫山人の『壁の耳』思案外史が『狼毫小楷』格別のものにも非ず、紅葉山人の『風流妄語』は風流人の讀むものなり。

〇浮木丸及世話女房　紅葉、風葉作　春陽堂版

釘裝の凝つたる、挿畫の美しき、近頃の絶品なれば、これはまた如何なる珍話奇談、名文妙字かと思はるゝに、豈に圖らんや『浮木丸』とは、單に一篇の御伽譚にてありけり。浮木丸といふ、塵塚の佐治六の厄介息子たる美少年が、鬼人の頭の毛三本抜いて、國主となるといふ妙々珍談、アレビアン、ナイトにでもなりさうな話。蓋し外國種の飜案なり。去かし輕華なる滑稽、讀者の頤を解かしむるもの多きは、流石は紅葉の腕前なりといふべし。

いつもの如く紅葉補とある風葉の作『世話女房』は柳浪子の作にも劣らぬ悲慘の話。四人交野春之助の女房お夏が天理教に惑溺して、其父に神水と唱ふる腐敗水を與へて、醫師の藥餌を求めず、所謂おぬくもりの祈願の料金七圓を得んが爲めに、其子を殺して發狂し、父はまた腐敗水のきゝめにコレラ病に罹りたり。其監獄署を叙する、其避病院を記する全篇いづこを見ても、話の筋の悲慘ならぬはなく、無慈悲なる人間、妖教の害毒細に之を擧げて世に示さんとするものゝ如し。然れども筆鋒の巧妙なは柳浪に及ばずして、タスキ所の多きが落目なり。又處々作者の議論をさしはさめるなんど實にあらずもがななり

片々

◎木場專門學務局長　若溪會演說中、女子就學の寡少と、高等女學校の欠乏を嘆し、其結果日本國が諸强國の間に介立して其名譽を維持せんこと甚だ覺束なき次第なりと嘆ず。

◎同志教育　曩に本誌女子高等教育機關の必要を論ずるや、之を賛するもの『同志教育』ありてまた切りに之が必要を論じ、今日は女子大學創立の好時機なりと稱し、かつ女子教育奬勵會の設立を促す。

◎國民の友　第三百十七號社說『新聞記者の立脚地』を論ずるが中に、『婦人の味方たるべし』の箇條說に曰く、儒教侵入以來抑壓せられたる婦女は、今より五十年や百年位囘護したりとて、跋扈を憂ふるほどには至らざるべしと。また曰く蓄妾聘妓、婦女を牛馬視する如き無血動物は、到底進歩主義と終始する能はずと。

◎經濟雜誌　に雨夜亭なる人あり、『女德の衰頽』と論じて昔の女子を褒め、今の女子を貶す。然れども比較の標準頗るあやまり、たゞ〳〵憎念を今の女子に挾んで之を難ずるもの、如斯きを妄斷曲論とはいふ。蓋し論者自らもまた論じ了りて其所謂『今日の娘』を實際に見出だすこと難きを知らん。

◎小兒喫煙者の自殺　米國ミシガン洲サッナウに本年十二歳なるエデー、リーなる小兒ありしが、好煙の極精神錯亂し頃日自殺を遂げたり。

◎曙女史の遺稿　曙女史木村榮子、才藻を抱いて、地下に入りし以來、今年十月十九日を以て、其七回忌に相當するを以て、兼てより女史が友人某々等編纂にかゝれる女史が遺稿をば、女史生前の知人に分つの企てありといふ。遺稿といふは嘗て讀賣新聞に出せし『婦女の鑑』なりとぞ。

◎小蘋女史　日本美術協會秋季美術展覽會出品の爲めに、西園雅集の大畫幅を作したり。描法奇變著彩艷麗、閑雅掬すべく、他日場に登るの日は、以て人目を驚すに足るべしといふ。

◎救世教　の教主大道長安『婦女身章』を說いて曰く、佛教は、男尊女卑、男女同權、相敬相愛の三方より婦人を見る、男尊女卑は他力宗の說く所、男女同權は自力宗の唱る所。然るに今日迄その男尊女卑や、男女同權の教を以て教育せしものから、兎角卑屈根性を起し、藤蔑主義に陷らしめた、これ決して、釋尊の御本懷に非ず、釋尊の御本懷とは所謂觀音經に殊更に婦女身を擧げ來りて、婦人の大德を顯はし、相敬相愛の道を全うすることなりと。

◎東京府下貧民の種類　時事新報によるに府下貧民の種類は左の如し。

野ぶせり(乞食)　袖乞(不具癈疾)　請願寺參り　六十六部　西國巡禮　瞽女　盲人の手曳　すわり(橋畔又は路傍にて三味線を曳く者)　紙屑拾ひ　紙屑撰り　魚腸拾ひ　古下駄買ひ　下駄歯入れ　硝子毀買ひ　猿廻し　新内語り　阿房陀羅經　角兵衛獅子　あひる(泥溝中にて埋沒品を拾ふ者)　下等羅宇仕替へ　草むしり　かるこ　土方　荷車後押し　土車挽き　(或は石炭)立ん坊　井戸屋綱曳き　下等車夫

而して彼等の多く巣窟をなすの所は、下谷万年町、芝新網町、四谷鮫が橋、等を以て最となす。

◎結婚奇談　香川縣の伊吹島にては、初婚のものは島外に嫁するを許さず。而して娘と息子との双方の親達が、先づ契約を取結びたる上、村内の若衆會へ此由を通ずれば、若衆會は直ちに會議を開き、滿場異議なきに於ては、早速娘の家へ異存なき由を通ず。娘の家にては、此通知に接すると同時に、娘と酒とを携へて若衆會へ連れ行くなり。該會にては其贈られたる酒を飲みたる上、娘に向ひて『汝は

何某の嫁となるべし』と命じ即時に其嫁を連れて。貰ひ方の家に行き、『ソレ連れて來たぞ』と云ひ棄てゝ立ち去るなり。斯くて此新婦の小兒一人を擧ぐるを待ち實家より戸籍と嫁入道具とを贈りて、玆に三三九度の式を擧ぐるといふ。(都新聞)

時報

◎大阪婦人慈善會慈善市

豫記の如くに、同會は去る十日より三日間大阪北區堂島の商品陳列所にて開かれ會員の貴婦人諸氏皆夫れ〲受持の賣店へ廻り、賣附に盡力し、又た抹茶煎茶の兩室を始め、麥酒店などもあり。餘興には素人淨瑠璃、舞、三曲などもありしよし、來會者三日間にて二千餘人、收入八百餘圓。去かし思ひの外費用のかゝりしには、幹事の諸氏も當惑の姿なるよし傳ふ。

◎甫守謹吾氏

往年福岡市に一大婦人會を首唱したる以來、頗る女學の爲めに盡瘁せられ、また彦根高等女學校を創設して、先頃まで其の校長となり、斯界に重きをなしたる同氏は、今般兵庫縣私立教育會の常主講師に聘せられ、校長辭任の上、赴任ありたり。就ては同地の人々甫守氏の轉任を惜むと一方ならず、盛んなる送別會を開きたりと報ず。

◎水彩畫展覽會

洋畫の大家松井昇氏の發起を以て、來る十一月中旬を期し、明治女學校新築義捐の爲め、府下日本橋倶樂部に於て、水彩畫展覽會を開かるゝよし。

◎婦人義勇會　柳生子爵夫人及び松本愛子等の發企に係る、大日本婦人義勇會は目下種々協議の最中なるが、其趣意は、普く同志の贊成を得て、數百萬の會員を募り、同會員は毎月一錢以上の積立金を爲し、積んで相當の額に達するに及び、之を政府に獻じ、製艦費の一分を補はんとするにありと。

◎醫科大學産婆講習所　にては今回四十名の新入生徒を募集し、本月廿六日入學試驗執行のよし。

◎海外女界

◎クラヽパリシュ女史　前號に報じ置きたる同女史は、聞く所によれば布哇ホノルヽ府にて、熱病に罹られし爲、豫期の如く、去月二月十二日に來着なく、今なほ以て來朝なし。

◎濠洲の婦人本邦に渡來せんとす　有名なる婦人旅行家エリス孃は、去月二十六日西部濠洲を去りて、新嘉坡に到着したる由なるが、孃は日本に渡來して當局者に面會したる上、濠洲人は日本勞働者の同國に出稼するを、甚だ迷惑に感ずる趣を述べ、輿論に訴へて、是非とも濠洲出稼禁止の運動を試る意氣組なりと報知新聞は傳ふ。

◎佛國婦人の徒歩世界漫遊　佛國の一寡婦マダム、マッシューといへるは、此度徒歩世界漫遊せんと思ひ立ち、既にペシールに到着し、近日同地を去り、緬甸、暹羅及びメーコンの各地を經て印度支那に旅行する筈なりといふ。

◎婦人の名譽　去る九月十五日瑞西國ゼチバ府に於て開かれたる万國慈善同盟會及び万國小兒保護會列席の爲、米國政府は特に辯護士ベルバ、エー、ロックード夫人、學務局員フランセス、グラハム、フレンチ夫人を代員として派遣したりと兩人はまたバタペスト府の万國平和協會、及び九月十九日伯林府開會の万國婦人同盟會へも列席したりとぞ。

◎ラマバイ女史の成績　印度變國の婦人ラマバイ女史が其學校設立以來の成績を聞くに、四人の寡婦は再婚し、多くの處女中四人は校外に教師として働き、其内一人は自ら幼稚園を設立したり。なほ四人は看護術を研究し、三人は女史が學校に助手たり。また二人は寡婦救濟の事業に任じ、他の二人は無學婦人の友として彼等を教育せんとし、また一人は下等社會婦人の教育に身を委じたり。學校はいよ〱盛運に赴き、而して米國なるラマバイ協會は、博士ライマン、アボット氏之が會長たり、フランシス、ウラード女史は副會長の一人なりといふ。

◎土耳古女子教育　合衆國女子教育會社は、巨金を投して、小亞細亞地方に、女子教育の普及を計り、千八百四十年初めてコンスタンチノップル府に一女學校を創立し、今や、小亞細亞地に十六個の高等女子教育の學校あるに至れり。其教師はみな合衆國各大學出身の米國女子にして、學科程度も高尚に、教授法は近世的なり。學校の勢力は頗る强大なりといふ。

大和田建樹先生編

日本大辭典

本書は活字の精良を以て本邦第一の公評ある築地活版製造所に於て全部新鑄活字を以て鮮明に印刷致候

製本既成

全一册 縱六寸五分 横四寸五分 紙數

二千頁 紙質 精良 總皮洋

装 堅牢 美本印刷鮮明

豫約法

正價 金三圓 製本既成に付御申込順にて十月十二日より送本

豫約特別 {廿九年十月卅一日迄に代金相添御申込の方に限り 金一圓六十五錢
廿九年十一月卅日迄に代金相添御申込の方に限り 金一圓八十錢}

小包郵便遞送料十里迄…金九錢　百里迄…金十六錢　百里外…金卅二錢

注意 豫約申込期限は十一月卅日迄にして期限後は此豫約特別廉價は堅く廢止す。殊に十月卅日迄に御申込の方は前記の如く特別廉價に相成候。且つ第一版は原版印刷に付再版以下に比すれば印刷一層鮮明なり。豫約御申込の方は第一版滿員以前に豫約代金(地方は小包郵便料とも)相添へ至急御注文被下度候。●豫約御申込は諸官廳の外總て前金を要す。見本は御申込次第進呈す

日本大辭書の特色は組織の新案にあり。解釋の適切にあり。引證の博多にあり。挿圖の緻密にあり。發音の明示にあり。索引の簡便にあり。故に學生用として、教師用として、獨學用として、專門用として、何れの社會にも利せざる所無かるべし。辭書の著世に多しと雖、通俗雅馴兩つながら兼ね得らるべきは、抑も本書の右に出づるものなからん。

日本大辭書豫約出版元

東京日本橋區本町三丁目 博文館

明治女學校募集金

第五回廣告

金三十五圓也
金三十圓也
金廿二圓廿四錢(二磅)也
金十八圓也
金十圓八十錢也
金十八圓也
金十八圓也
金十圓也
金五圓也
金五圓也
金二圓也
金五圓也
金十錢也
金廿錢也
金十錢也
金十錢也
金十錢也
金五錢也
金廿錢也
金十錢也
金廿錢也
金十錢也
金廿錢也
金一圓也
金十錢也
金五十錢也
金二十錢也
金一圓也
金一圓也
金五十錢也
金三十錢也
金二十錢也

名古屋船入町
東京元園町
英國
上州足利町
同
佐渡川原田町
青森八戸町
東京中六番町
ハワイ
東京
同
岡山縣和氣日吉
函館婦人矯風會

見田清左衛門殿
船越欽哉殿
カザリン、プレスエート殿
田中たけ子殿
萩野文八殿
中山光子殿
松岡もと子殿
上野みわ子殿
大久保真太郎殿
無名氏殿
鈴木よし子殿
吉田里子殿
田中あい子殿
青木いそ子殿
石川こと子殿
櫻田福米子殿
矢野のぶ子殿
齋藤きよ子殿
柴田なる子殿
高橋りき子殿
松村みね子殿
三上くは子殿
岩谷よしの子殿
大岡まつ子殿
木下とき子殿
栗原たつ子殿
伊藤りゑ子殿
北原やす子殿
須藤八重子殿
宇野みち子殿
大平なみ子殿
相馬きん子殿

明治廿七年一月十四日内務省許可
明治廿九年十月二十四日印刷
明治廿九年十月二十五日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 根岸高光
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

明治廿五年三月十五日遞信省認可

